



市
中
の
山
居

市
中
の
山
居

目 次

■ 会長挨拶 （日本建築美術工芸協会 会長 東條 隆郎）	2
■ ご挨拶 （情報文化研究委員会 委員長 高橋圭太郎）	3
■ 今なぜ「市中の山居」か？ （情報文化研究委員会 元委員長 故 坂上直哉）	4
■ 「市中の山居」座談会 ― 共に創る時代へー aaca 30 周年記念事業「市中の山居」座談会 市中の山居 ―土木・ランドスケープ・建築・アートからのアプローチ	5
■ 原風景から池へ ― 「市中の山居」の原点を探る― 「市中の山居」を探るキーが“東京の池”に?! ① 「市中の山居」を探るキーが“東京の池”に?! ② 「市中の山居」を探るキーが“東京の池”に?! ③ [コラム] 明かされた日本最古の池「飛鳥京跡苑池」1300 年前の姿は [コラム] 平安から伝わる市中の山居「浄瑠璃寺の池」	15
■ 現代の「市中の山居」― 3 つの池を考える― 「市中の山居」を探る 3 つの池 ◇柏の葉キャンパス・アクアテラス UDCK 出口 敦センター長 インタビュー UDCK 鈴木弘樹ディレクター インタビュー ◇越谷レイクタウン 大相模調節池 越谷レイクタウン・大相模調節池越谷市開発担当者 大島 健氏に聞く 越谷レイクタウンで市民活動をしている畔上順平氏、藤田 融氏に聞く ◇高ヶ坂松葉調整池 NPO 法人鶴見川源流ネットワーク 深見幹朗氏 インタビュー 高ヶ坂松葉調整池訪問 鶴見川流域センター訪問 [コラム] 『生きのびるための流域思考』 慶應義塾大学名誉教授 岸 由二著 [コラム] 慶應義塾大学 満倉靖恵教授インタビュー [コラム] 「柏の葉に S M C がやってきた」 鹿島建設 建築設計本部 建築設計総括グループ 丸山 琢氏に聞く [コラム] 関東平野のグランドデザイン	23 26 31 38
■ 「市中の山居」から学ぶこと ―新たな領域を目指して― 坂上氏のメッセージを読み解く （情報文化研究委員会 元担当理事 尾崎 勝）	50
■ 編集後記	56

市中の山居―共に創る時代へー

日本建築美術工芸協会 情報文化研究委員会

会長挨拶

日本建築美術工芸協会 会長 東條隆郎

一般社団法人 日本建築美術工芸協会は、「故芦原義信氏が求めた文化的都市の創造を実践する為に、建築・美術・工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し、交流し文化と芸術性の追及と情報の発信を行い健康で文化的な空間創造に寄与する」との憲章の下に 1988 年から活動を行っています。

情報文化研究委員会では、この数年「市中の山居」というテーマを中心に据えて「水と緑」を切り口に様々な視点・角度から都市の空間・環境と人々との関係を分析し捉え直すことに取り組み研究を続けてきました。

21 世紀に入り地球環境が危機に瀕しています。コロナ禍により人々の行動にも大きな制約を受け、今まで築き上げられてきた人々の考え方・価値観が大きく変わりつつあります。

さらには AI の登場により地球・社会全体に大きな変革が起ころうとしている今、まさに人間の生きる環境の原点をもう一度見つめ直し捉え直すことにより、次の時代への新たな展望が見えてくるのではないかと思います。この冊子は、建築・美術・工芸・ランドスケープなど空間創造にかかわる私たち（米国の作家ヴォネガットが「アーティストは炭鉱のカナリアである」と表現していますが） 感性豊かなアーティストも含め aaca の多様な方々が参加して、様々な視点で制作されています。

私たち人類は何億年という時を経て、生命体としての人間として、今の世界の都市の空間・環境の中で生きています。このかけがえのない環境の有様と人々との関係を学び、それをこれからさらに豊かなものとして、共に創り続けわかちあうことに、この研究がその一助になることを願っております。

2025 年 5 月

東條隆郎

1950 年生まれ

三菱地所、三菱地所設計在職中の主な作品

広尾ガーデンヒルズ、金沢パークビル、丸の内ビルディング

有楽町駅前第一地区再開発事業（有楽町イトシア）

丸の内仲通り、丸の内パークビル・三菱一号館美術館

パレスホテル東京

STUDIOTOJO 東條隆郎建築都市設計室 代表

一般社団法人 aaca 日本建築美術工芸協会 会長

ご挨拶

情報文化研究委員会 委員長 高橋圭太郎

「市中の山居」とは、現代人の都市生活においても必要とされる場所なのか…。そのような命題から、土木・ランドスケープ・建築・アートの立場から座談会を行ったのが 2018 年の 11 月。

「市中の山居」とは、本来、都市の喧騒の中であって心静かに落ち着きを取り戻す、精神性の高い“場所”を指しています。室町時代後期、混沌とした戦乱の時代において生まれた“茶道”に由来を持つこの言葉には、当時の世相を反映し、平和を渴望する大衆の支持があったと想像されます。

茶の湯の普及は、自由を謳歌する堺の商人達の卓越した先見性と、時代の寵児でもあった、織田信長や千利休の思想信条が色濃く反映されていて、キリスト教の爆発的な普及や身分制度さえも乗り越えようとする、その後の天下人、豊臣秀吉を生み出した社会の大きな潮流があったと考えられます。

そして現代… 高度に発展した私達の社会は AI に代表されるコンピューター技術の躍進により、大きな変革期に際していると思われます。

人々は、漠然とした不安を抱え、世界中で止まない戦争や紛争と様々な社会的困難、ストレスに直面しています。加えて、昨今の深刻な異常気象…熱波や巨大台風の発生。線状降水帯と呼ばれる集中豪雨など、著しい環境変化に備える術として、AI は欠かせない技術だと期待されています。

半面、IT 技術が高度に発展した現代社会において「市中の山居」の必要性を論じたとき、人間が本来養ってきた、火・水・木・土といった自然物から得る、基本的な肌感覚は薄れ、安全に対する判断力が弱くなったように感じています。特に“水辺”に関する価値観の変化は、生命を脅かす厄介な存在として扱われることも多くなりました。

かつて、身近にあった「池」とは直接的な利水であり、食を生産し文化的生活に欠かせない重要な装置であったはずです。水辺は人々に安心を与え、賑わいを生みだし、心癒される場所であったと思います。池には月が写り、水面を渉る風は多彩な波紋を描き出し、移りゆくその様は「止観」と呼ばれ、宗教的な意味合いを色濃く有していました。

我々の研究も、心を静めて物事の本質を深く見つめ、日々変貌する都市の在り方を見据え、気候変動や生物多様性、アート性という観点から、新たな役割を持つ存在として扱われる「水と緑」に改めてフォーカスすると共に、現在まで存続する池との違いを学び、移り変わる価値観とその代表的存在でもある「調整池利用」にまで画角を広げ、現代の「市中の山居」を考えてまいります。

2025 年 5 月

今なぜ「市中の山居」か？

情報文化研究委員会 元委員長 故 坂上直哉

情報文化研究委員会（情文研）は標題のテーマを深めるために、個々の「原風景」を語ることから始めた。原風景とは、幼年期に刻印され、成人の感性の中でもなお、刻み込まれたまま残っている風景を言う。

驚いたことは、委員が挙げた「原風景」には「建築物」が皆無だったことだ。また、「原風景」が大きく姿を変えていたという事実だった。姿を変えたという事実はとても重要だ。時代の変化速度は、江戸時代が1キロだとすると現在は80～100キロのスピードで疾走していると言われている。私達は、人類史上最も高速な環境変化の中で育ったと言える。

文明を本質的に胎動させているのは経済構造の変化と、それによる経済の拡張だと考える。幾何学的エレメントにより重点を置くアール・デコからモダニズムへと展開した、近代建築の父と言えるマッキントッシュが、1900年にウィーン分離派やオットーワグナーを訪問した際、数万のウィーン市民が迎えたそう。その逸話を聞いた時、ビートルズでもないのになぜ建築家に？だった。

産業革命で、居住地、仕事、宗教、交通、電信、教育など全ての環境、風景が変わる巨大なうねりの中で、人々の精神的な不安は極点に達していたのだろう。その不安に応え、当時の市民の心に響くパラダイムとしての都市建築空間を創出できたからこそその歓迎で、それは西欧においてのパブリック合意だった。

時代の人々の不安を喜びに導くことのできるのは、見えなかった価値を顕在化する、真のクリエイティブだ。新たな都市美、音楽、芝居、ダンス、年中行事などの文化創造は、その国のアイデンティティの新たな形成と言える。

私達は、手に触れられるモノの革命（例：箒→掃除機）のなかで育った。現在は、デジタル革命、IT革命、AIー人工知能革命の真っただ中だ。インターネットによる情報革命は、産業、行政の在り方、個人のライフスタイル、コミュニケーション手段、都市の概念や場所性、国の在り方まで変えつつある。

この巨大な都市風景の胎動に対して、私達は何をすべきか…。日本人のみでなく、世界の人々やクリエイターがこれまで体験したことのない変化の潮流に翻弄されるのは当然としても、クリエイターとしては醒め、共有される日本文化からの視点が求められている。

東京は文明、文化的秩序の高い都市だが、寺社を包む照葉樹林の名残「鎮守の森」が点在し、七福神やお稲荷さんを祀る社は至る所にある。屋敷内、町内会、ビルの屋上…見渡せば数限りなく祀られており、東京という大都市の視線、裂け目は自然の彼方、聖性に向かって開いている。

江戸時代は都市のプランを支配していた霊山・富士山は、文化の境界の内と外を一気に打ち破っている。「市中の山居」という言葉を生み出した茶道は、草庵、茶碗、釜、露地、生け花など、極めて高度な技術を持って、自然への通路をつくりだしている。

私たち現代人は、都市の空間に、高度な技術を持って何ができるのだろうか？

今こそそれを、再考する時と考える。

（2019年8月27日 情報文化研究委員会 配布資料）

「市中の山居」座談会 ー共に創る時代へー

「市中の山居」座談会

- aaca 30 周年記念事業 座談会
「市中の山居—土木・ランドスケープ・建築・アートからのアプローチ」
- 2018 年 11 月 30 日 18:30 ~ 20:30
- 東京藝術大学美術学部第 3 会議室



内藤 廣氏
建築家



三谷 徹氏
ランドスケープアーキテクト



故 坂上直哉氏
美術家

MC:「市中の山居」をテーマとした建築家、ランドスケープアーキテクト、美術家の三人による座談会です。皆さんは幅広く縦割りじゃない部分まではみ出して活躍されているんですが、それぞれのスタンスを教えてください。

三谷:私はランドスケープを専門にしていますが、建築学科出身なので建築大好きです。ですがやっぱり、常に反開発・反建築です。都会は嫌いなので、反都会ですね。あるいは都会が建築をつくっていく向こうに、自然というつまらないですけど「何か次が見えないのでしょうか？」といつも問いかけています。

内藤:人の居場所を作ることを考えています。特に 3.11 に深く関わって、被災地に立った時に、人の居場所がないと感じた。それから人が居ても良い場所とか、身の置き所とか、そういうことを強く思うようになりましたね、この 7、8 年。

坂上:僕は美術家ですが、他のみなさんと同様にチョットはみ出しているので、スタンスを説明するのは難しいんですけど。ただ私と一緒につくったものが皆さんの心を豊かにする、あるいはその空間を楽しく思ってくれる、そんな時間を作れる、そんな形態・形ができればいいな、と思っています。そしてさらに言

うと、人間の心を超えた何かを表現したい。それが都市空間にこそ必要なのだと思います。

「今日の市中の山居」は必要か？

坂上:「市中の山居」とは、都会の喧騒の中であって、自然に近い、心を落ち着かせる空間を指して一般的には使われていますが、元は茶の湯の言葉でした。茶の湯が完成されたのは、戦国時代に黄金期を迎えた「堺」。環濠がめぐらされ、日本史上珍しく自然から切り離された大都市空間・堺で、当時の人々は「自然との通路」を希求したのでしょう。

東京中心部では、世界に通用する金融都市となるべく、世界を見据えた 10 を超える巨大再開発プロジェクトが進行しています。2028 年までの間に 280 本の高層ビルができます。すでに高層ビル群があちこちで姿を現し、都市の超過密化は避けられません。そのうちの 35%が住居空間となるそうです。

都市は、ロンドン、パリ、ニューヨークに限らず、その文化を育てる主体はそこに住んでいる人たちです。堺は四方が堀で囲まれています。日本の都市の中できちんと堀で囲まれ、カントリーと都市が分かっていたのは堺が最初で最後だろうと思います。自然と隔離された金融都市・堺で「市中の山居」が編み出されました。これは茶道の発展によって生まれたので



座談会風景

茶道の意味を確認してみます。

「茶道は花鳥風月をあらわした物と所作をつなげ、複数の人々を心の豊かな交流を庵でおこなう文化」

「物」は我々がつくっている「建築、造園、美術など」を意味し、「所作」は「人の動き」をあらわします。そういう文化を当時つくりあげて、それが現在まで続いています。

堺の都市文化は今の東京にみることができます。新たな都市風景の中で、私たちは日々の暮らしを営み、働き、次世代を担う子どもたちも育っていきます。国内外からの訪問者も多く訪れます。現代の東京において「市中の山居」は必要なのでしょうか？また、必要としたら、どのようにしたらつくれるのでしょうか？

今日の市中の山居： 品川セントラルガーデン

坂上:「市中の山居」と言って何を話し合えばいいのかということになってくるのですが、ひとつ共通の場所を設けようと思い、三谷さんが設計された品川セントラルガーデンの見学に行っていました。品川セントラルガーデンというのは品川駅の昔の東南口です。ペDESTリアンデッキ（注 1）に繋がっているのが、品川インターシティというビル群の間にある南北に広がっている場所で、幅約 45 m、長さ約 400 m で 2ha 大きさの場所があるのです。これは公園といったらい

いか公開空地といったらいいのか大空間でよく分かりますが、まずは体験してみました。こういう場所に行くとは大概、緊張してがっかりして帰ってくるのです。しかし行ってみてなかなか楽しい 良い空間だなあと皆が感じたのです。

私達が行った時はちょうどお昼休みだったのです。セントラルガーデンにビル群から三々五々人が出てきて、木陰でお弁当を広げたり皆それぞれ休んだりしていました。割と一人ひとりがいろいろな自分の居場所を見つけて楽しんでいると感じました。奥に住宅棟が 1 つあるのですが、そこにメダカがいたり、小さ



三谷氏スライド画面

な金魚が泳いでいたりする小さい池みたいなどころがあり、子供たちが遊んでいたりと犬の散歩をしていたりしていました。フォリー（注2）があり、その壁面に鏡状の部分がありました。その部分に緑が映り込んだりもしていました。なかなか楽しくて皆くつろいでいたのが印象的でした。

（注1）ペデストリアンデッキ：建物と建物をつなぐ歩行者専用の歩道

（注2）フォリー：東屋的な小屋

三谷：我々は自分のプロジェクトに行くとか何か問題起きてないかそっちばかり気になってしまいます。素直に見ることはないのですけれども、これがまあ都市計画の中でどうできてきたかというのをお話しした方がいかなと思います。私が設計となっていますが、たくさんの事務所や人々がかかわってできております。

1983年に計画策定委員会が始まっていました。ここで中心となる「歩行者大空間」は、土木インフラと都市インフラを全部どう整備するかということから出てきた空間です。このスーパーブロックの地下に道路を通して、駐車場各棟へのアクセスを取り、公共駐車場もありというのですね。それが1992年に決定されているのですが、もうそれは非常に大きなファクターだったということを知っておかなければいけません。

1989年くらいに「こういう空間ができるのですがどうしましょうか」って聞かれた時に、その時まだ30歳ぐらいでした。人なんか入らなくていいから木で埋めつくしましょうと言ったら、意外となるほどと言っていました。ずっと河口の運河だったとい



品川セントラルガーデン

う経緯があってこの土地が現れたのだらうと思いましたので、とにかくこの南北に長い形を都市の中で定着させること、それがランドスケープの果たす責任じゃないかと思いました。地下から品川千本桜の名所が隆起してきたというようなイメージで考えていきました。日本設計、三菱地所、大林組、最後に松田平田設計にバトンタッチされていきましたが、みんなで知恵を絞って今のシンプルな形につながりました。フォリーが点在していますが、これは地下のいろいろなインフラの換気口の役割をもっています。それを隠すためにむしろ表現して人がいられる東屋にしています。ここには港区と品川区とで空間自体の4分の1ぐらいのところで区境があるのです。品川区1つと、港区2つの公園1つ下の中で民間と2区が一緒に

テーブルを囲んで、同じデザインをつくろう、というのも当時は行政的には大きな一歩を踏み出してくれたなと思います。私はこうして木で隠れる場所じゃないと、絶対日本人は出てこないと思っていました。日本人は皆シャイなので皆がワーと集まる広場っていうのはどうしてもイメージできませんでした。ヒューマンスケールでできた、個人個人がそれぞれ居場所を見つけられる仕組みになっています。

竣工は2003年です。施工にも関わってくれた箱根植木さんですね。木の状態管理もしてくれています。とても重要なのは、この空間全部を一体管理として一社が全部まとめてみていることです。箱根植木さんが幾つかの場所の定点観測をされていて、全部デジタルで情報を取っていて「管理＝空間づくり」と

いうことをされています。

異分野とのコラボレーション

MC：品川インターシティーはグッドデザイン賞を受賞していますが、審査員をしていた内藤さん、評価はいかがでしたか？

内藤：良い場所だと思います。特に真ん中のスペース。あれだけの空間が緑で埋め尽くされているのも珍しいと思います。それに表に出て来るものがちゃんとデザインされている。木をたくさん植えるのも大事ですけど、全体の完成度が大切です。人が歩いたときに、あちこちに新しい提案もあって楽しい。



品川セントラルガーデン フォリー



現地にあったマップ



品川セントラルガーデン フォリー



渋谷川からの風景

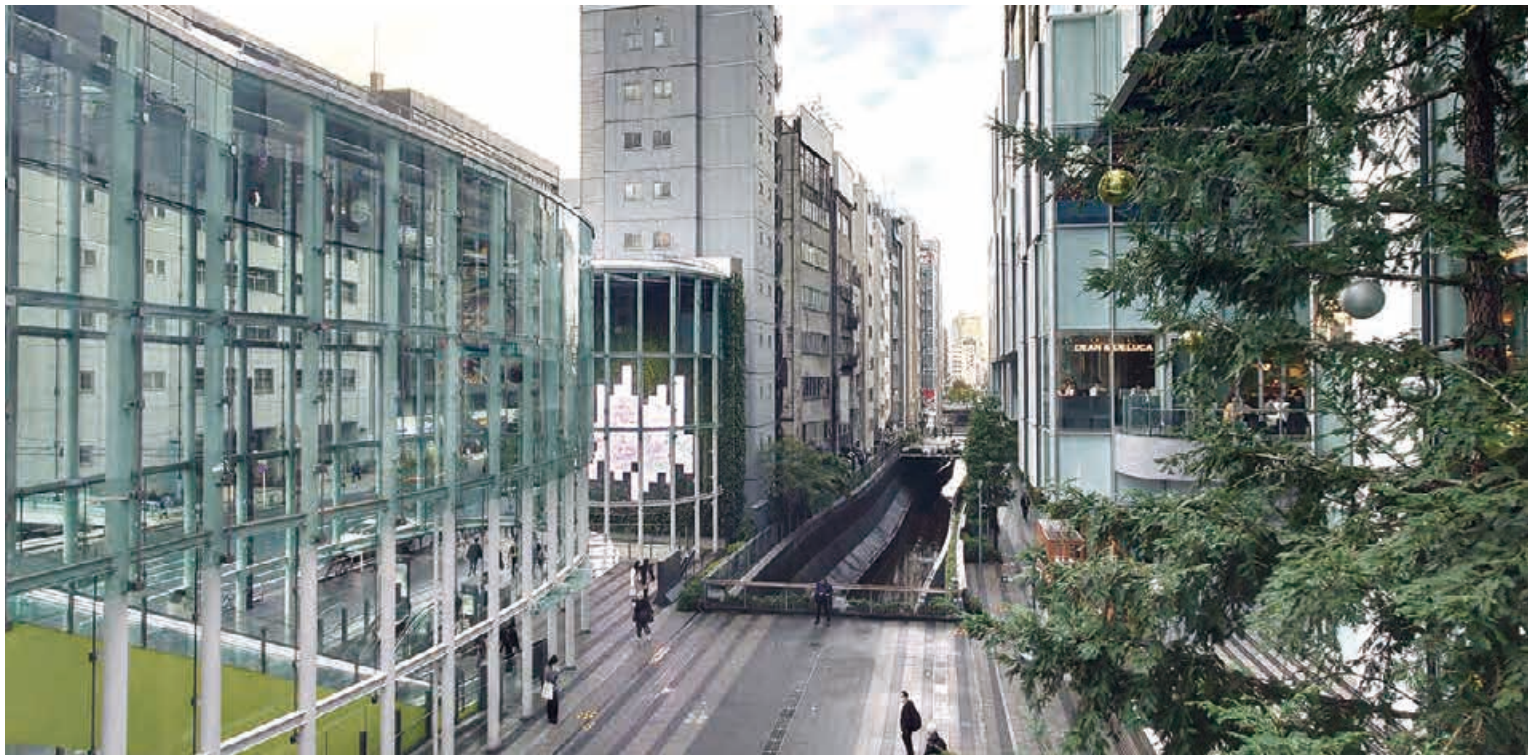
坂上：公園の概念からはみ出ていますが、身近に感じつつ、押し付けない優しさを感じました。三谷さんにフォリーについて伺たいです。上に登って、昼寝してなどいろいろと自由な使い方がされていました。

三谷：フォリーは 1988 年にもの派のアーティスト関根伸夫さんの事務所にお願ひしました。当時関根さんに師事されていた団塚栄喜さんが担当されました。団塚さんにはキューブの黒いオブジェは沢山存在するから、組み合わせて鏡面、ヘアライン、バイブレーションで景色を写して存在を消して欲しい、とお願ひしました。組み合わせた立方体が色々な姿になるように二人でやった作業でした。

MC：内藤さんはアーティストとコラボすることはあるのでしょうか？

内藤：ありました。あまり議論はできなかったですが、できるだけやりたいことをしてもらおうと思いました。こちらは下地を作るだけです。アーティストは建設や施工に対しての知識がないことが多いので、こちらがサポートすることになります。エンジニアリングが分からないと無理なこともあるので。こちらあたりは坂上さんに聞いてみたいところですが。両方分かる人はあまりいないと思いませんか？

坂上：多くのアーティストが美術館ですとか、額の中



渋谷ストリーム

を目指してつくるんですね。その時は問題が起きりません。ただし今日の話は「市中の山居」ですから外部の公共空間です。地震もあれば、風も吹く。何かをつくりたいと言うアーティストは覚悟しなければいけない。僕は「こういうアートができたからここに置く」的なことは言いたくありません。他分野のみなさんとプロセスを共にするということができないかと考えています。建築家やランドスケープの方は、まず敷地に行って非常に深い観察をし、歴史、文化、民族の背景も含めてイメージをつくっていることが分かります。そのプロセスを共にすることからしかコラボレーションは始まらないのではないのでしょうか。

三谷：おっしゃる通りです。品川は一からアーティストの団塚さんと決めて一緒にやったという共感があります。今でも毎年 1 回品川で酒を飲んでいるという良い例です。それとは別にまったくコミュニケーションが取れなかった最悪なパターンもありました。

サイトスペシフィック

三谷：もう 1 つ話すと 70 年代からアースワークというアートが生まれ、自然を素材とする表現形式を意識するアーティストが出てきました。ロバート・アーウィン（Robert Irwin）というアーティストが、サイトドミナント（site dominant）、サイトアジャステッド（site adjusted）、サイトスペシフィック（site specific）と

表現しています。今までのように「敷地を支配するように彫刻を置く」という「サイトドミナント」。「敷地に合わせよう」という「サイトアジャステッド」。そして「敷地と会話をする。敷地のために作品はあり、その特徴を暴くために作品を作る」という意味で「サイトスペシフィック」という言葉を使うようになりました。

渋谷は巨大な建築や開発がおこなわれています。それらは土地を使って人の居場所をつくるのですけど、そもそも開発という所作は渋谷に何を与えてくれるのか。あんな大きいことをやっているとか。

内藤：体に悪いですよ。

もともと超高層は好きではないんですよ。でも一方で、「好きではない者がマスターアーキテクトをやった方がいい」とも思っています。僕も「超高層なんて…」と思っていますよ。だけど、時代的には都市再生特区で街を更新していくためにはやらざるをえない。その中で、今あるものをどうやって渋谷のために改変できるか。そこを繋いでいくのが私の仕事だと思ってやっています。超高層はその場所の個性とか持ち味とは無縁になりがちです。人口密度が非常に上がるわけですが、エレベーターで降りてきたとき、その地表面が上手くできていないといくら再開発をやっても失敗すると思うんです。

坂上：外国から来る観光客ですとかとても大事ではあ



渋谷川側壁からの水の流れ

りますが、「今日の市中の山居」という提案は超高層の 35% の居住空間に住む生活者がどう文化をつくっていくのが大切になると思います。そういう文化を引き受けていく良き空間、ランドスケープと僕たちアーティストとも話し合っていたらいいと思います。アーティストは風景をつくる所から、ある意味で置き去りにされていると感じています。その理由もわかります。ただし、ある時代の美意識ですとか、都市の技術ですとか、それらを持っている人たちが都市と一緒につくっていくという風にはいたっていません。最後にこういう物を置こうか、とした瞬間に大変な騒動が起きるということです。

三谷：いろんなテーマが浮かんできました。今日は内藤さんに会うということで慌てて、渋谷ストリームを観てきました。素晴らしいと思ったのは、誰でも考えつく「ストリーム」ができて「渋谷川」に光が当たったということですね。かつての渋谷川は雑居ビルと小さな住宅が背中を向けて囲んでいて下水道のようになっています。新しい渋谷川は脇を歩くようになっていて「渋谷は谷で川が流れている」ということを実感させてくれます。これによって住んでいる人たちがまちを好きになってくれるのですよね。渋谷川の側壁に水を流してあれば良いアイデアだと思いました。暗渠から出てきた水をポンプアップして白糸の滝のように側面に流して、空虚な空間が水に満たされています。

ゆっくりつくったものは間違いない

三谷：渋谷川のようなことができるということは、我々ランドスケープ側の人間が美術館の中でアートを観ているからだと思います。アーティストというのは、必ずしも街そのものにテクニクで参加してこなくても、もっと「概念的なヒント、手がかり、をつくって与えてくれている」存在だと感じていて、いつも感謝しています。

坂上：わたくしも他のアーティストの作品から影響を受けていることもあります。すばらしいのですが「積極的にアーティストが街をつくっていく」ことはできないのでしょうか。デザイナーや職人でもいいのです。建築家と共に、ランドスケープアーキテクチャーとともに一緒に考えていく方法は無いのか？一緒に街をつくっていくことが非常に大切なことだと思います。役割を超えてつくるプロセスが大切だと思っています。

三谷：アーティストとは幅が広いですが、私が今いくつかやっている活動のなかでもアート系の人に助けられることとして、北川フラムさんの越後妻有アートトリエンナーレなどの活動があります。北川フラムさんが関わるアーティストの役割・動きは日本初です。モノとか場所をつくるだけでなく、コトをつくる。アーティストが来てくれていきなり作品づくりではなくて、コンセプトづくりで2つぐらいあって、非常にお施主さんにも良い。プロセスを話せる若いアーティストが出てきて、モノの見方を変えてくれるという方も現れてきて、そこからブランディングの可能性を感じています。

内藤：基本的に日本を動かしているのは土木です。ですから、委員会とかやると、ほとんどが土木の人達で、たぶん僕も建築家としては呼ばれていないことが多いと思います。建築家はほとんど蚊帳の外です。その一番わかりやすいのが東日本大震災でした。16 の委員会の委員になりましたが、ほとんどが土木の人たちで構成されていましたね、役人もコンサルタントも。僕が委員長をやる委員会もあったのですが、その時は小野田泰明さん（東北大学教授）に委員として加わってもらいました。それ以外はほとんど建築家なんていない。ましてやアーティストが入る余地は皆無でした。

坂上：恐らくそうではないかと、聴いていました。恐らく建築家も土木の人たちとコミュニケーションする本当のツールを持っていないのではないのでしょうか。



渋谷ストリームと渋谷川

内藤：どこからかこの国はいつも「急いでつくらなければならない」ようになってしまいました。明治以来そうでした。まずは、急いで文明開花しなくちゃならなかった。そうこうしているうちに関東大震災が来て、第二次大戦で東京大空襲があって焼けて、いつも急いで復興しなければならない事情がありました。そうすると、水道だ、道路だ、というように分業でやるしかない。まちをどうしよう、建築をどうしよう、アートをどうしようというのは最後のところ。飾り餅の上のミカンの様なモノ。みなさんが言うように最初からミカンのことも考えるべきで、人間の生きていく文化をどうつくりこんでいくから始めるのが本当です。このことは 100 年抱えてきた問題です。

未来の「市中の山居」を目指して

MC：内藤さんがいつか昔対談したときに「土木でもゆっくりつくったものは間違いない。石積みみたいにゆっくりつくりながら間違いも分かってきて、途中で止めたり、つくり方を変更したりしてみんなで工夫しながらゆっくりつくったものは息も長いし味がある風景になる。」と言われていました。そのあたりも伺いたいのですけど。

内藤：東北の震災後にたくさんの建築家が三陸に行き、山のようにたくさんの提案をしましたがほとんど話を聞いてもらえなかった。しかし、土木は土木の事情があります。みんな必死でした。「私の意見を理解してくれない、と言ってワーワー言う前に、相手のことを理解しようとするのが筋だ」と建築関係の人たちには言っています。建築の人たちはどれだけ土木のことを知っているのか、どれだけ知ろうとしているのか。同じようにアーティストも、建築空間に出てくる

のであれば、どれだけその分野のことを知っているのか。それは大きいことだと思います。あきらかに勉強不足です。都市計画法を読めとは言わないけれども、「なんでそこに置いちゃあいけないのか」などという話を多少なりとも分かってもらわないと、これからも蚊帳の外に置かれ続けることになるでしょう。

坂上：羽田空港のアートを頼まれたときは模型をつくりました。そうしないと空間が見えてこないんですよ。共に空間を考えようということでしたら、人がどこから来るんだろうとか、光はどちらから来るんだろうとか。そのぐらいのことはしていないと話にならない。また建築とか土木の人は、何十年にもわたるコンセプトを非常に長いスタンスで考えている。それに比べてアーティストは、そういう考え方ができていない。内藤さんが言われたように、一緒に仕事をするのであれば覚悟して勉強しないとイケないのだと思います。覚悟して勉強してもかなり壁は高いんだと思います。

内藤：図面のスケールで言えば、「1/10 でも 1/100 でも 1/1000 でも理解しないと」という気持ちを持つことが大事だと思います。

例えば、イサムノグチさんと丹下健三さんがやった広島平和記念公園の慰霊堂、慰霊碑の提案。残念ながら実現しませんでした。あれってというのはイサムさんが殆ど自ら全てをささげて提案されたものです。イサムノグチさんは平和記念公園の意味と意図と全体構成を理解した上で提案されたと思うのです。そういう



『虹にそまって』 羽田空港 坂上直哉作

のがアーティストと建築家あるいは都市計画家の美しいコラボレーションと言えるんじゃないでしょうか。150%の意識でやっても到達しえないはるかに高い、なにかそういう目標物が見えたときに、建築家も、あるいは都市計画家もアーティストも横に並ぶものなのだと思います。そのための「常日頃からそれぞれを理解しようと努力する」ということがないと難しいのだと思います。

坂上：スタートするときにどうなるかわからなくても、オブジェができたかもしれないし、タイル 1 枚のデザインなのかもしれない。それはどちらでもいいと思っています。「わたくしという機能」をもって役だった、といったフラットな形でスタートできたらうれしいと思っています。図面なんて描かなくてもいいとおっしゃっていましたが…。

三谷：描かなくてもいいわけです。お互い理解すると言っても、相手の技術を学び直すとか理解することは必要なくて、真摯にというか、モノづくりの好きな方がプロジェクトのチームと一緒に居てくださるだけで、すごく刺激を受けるわけです。そういうコラボレーションを一緒につくることが大事です。

つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅で「駅前を木で一杯にする」と言ったら、道路課で「俺の眼の黒いうちは木なんて 1 本も植えさせるものか！」と言われたのです。土木と交通検査と道路課の方はたくさん理由があったし理路整然としていて、交通広場に木を植えるなんて非常識だということです。あの方たちの論理の中では、成程そのとおりなのです。しかしそのことは一旦忘れて、やっぱり木がある駅前がいいな、と思った自分を信じることにしました。柏の葉アーバンデザインセンターという場があって、結論が出ないので何回も言い合いをする。協議をする。ゆっくりつくり出す。お互いが考え出すプロセスが違うのです。そういう意味で「ゆっくりつくる」ということが大事だと思うのです。

アーティストは反芻みたいなイメージを追い求める。自分の中で何回も何回も同じことを繰り返してつくっている。

つくり方は、ある意味エンジニアリングの土木的なロジックを積み上げて直線的に物をつくり上げていくのと全然違うのです。その二つが同時に起こっている現場がいいと思うのです。

（情報文化研究委員会 栗田祥弘）



<https://www.youtube.com/watch?v=MIS0HYSM4is>

「市中の山居」を探るキーが “東京の池” に?! ②

情報文化研究委員会 前委員長 露口典子

『池の水ぜんぶ抜く大作戦』という TV 番組が人気だ。いつも風景として見ている池の中には何があるの
だろう？池は私たちの想像をかき立てる何かがあるに
違いない。

当委員会主催で開いた鼎談『市中の山居』（2018.11）
に端を発し、「池」に現代の「市中の山居」を探るカギ
を求めようと、東京の池巡りを 2 回実施（2019.10&12）
したところでコロナ禍に突入してしまった。（2020.4 会
報誌 No.87）

＜オンライン会議の始まり始まり＞

再開したのは去年（2020）11 月。オンライン会議
（Zoom）がスタートした。集まっの池巡りも会議も
不可。取材も不可…途方に暮れたが、まずは各人が関
心をもった池を取り上げて、話題を広げていこうとい
うことになった。3 週間ごとの水の日、水曜に「ワイ
ガヤ会議」と称して約 1 時間半、文字通りワイワイ
ガヤガヤが始まった。

＜Zoom ワイガヤ会議は面白い＞

やってみると Zoom 会議もなかなかのもの。日頃の
委員会では会えなかった関東圏以外の委員の参加が得
られる。そうすると、これまで東京周辺に限っていた
話題が、奈良や京都、富山、島根と広がって、各地の
池事情が見えてくる。

淡路島に行った三瓶委員から、日本一「ため池」が
多い（約 23,000）と報告があると、島根の中村委員
から「しまねため池保全管理サポートセンター開設」
の新聞記事が送られてくる。関西の大田委員からは奈
良のため池は「四角い皿池」との発言を得る。雨山委
員によると、目黒区碑文谷公園弁天池は昔ため池とし
て使われていたそう。そうか、東京にもため池はあっ
たのだ。でも、関西に多いのはどうしてだろう？それ
はですね〜と、また話しが弾む。

Zoom では資料の同時共用が可能だ。立松委員が動
画で紹介してくれた京都の代表的な池は、東京の大名
屋敷とは明らかに佇まいが違うことが参加者に瞬時に
伝わる。栗田委員が大宮氷川神社を取り上げて「神域
の池」を考えさせてくれたかと思えば、同じ神社仏閣
でも、奈良の寺院池の風情は全く異なっている。大田

ヨーロッパのギルドでは出てこない発想だろう。都市
にあっても自然との生感覚を取り戻していかないと魂
が枯れていく…など議論が弾んだ。

このようなことから、情文として「市中の山居」を
仮に定義づけてみたところ、「都市の中で、自然とど
のようにつながるかの方策だ。都市の中にあり、人工
的、文化的でありながら、自然とつながっているところ
を指す。」となった。

そして、具体的には、1 人の委員が挙げた「市ヶ谷
の釣り堀」がヒントになって、「東京の池」をテーマ
に「市中の山居」を考えていくこととなった。

＜東京の池巡り＞

東京は水の都として川や水路は多く論じられている
が、池に関する考察はほとんど見当たらない。池は風
景、文化と密接に結びついている。何よりも池は簡単
に埋め立てられる。残そうという意思がないと残せない。
どのようなことから池は残ったのだろう。
池を通じて「市中の山居」が意味していることが見え
てくるのではないだろうか、早速、代表的な 4 つ
の池を巡ってみた。

- 第 1 回池巡り（2019.10.12）
六義園、三四郎池、不忍池（参加者 10 名）
- 第 2 回池巡り（2019.12.14）
小石川後樂園（参加者 9 名）

池巡りの共通テキストとした小沢信男 / 富田均著
『東京の池』によると、4 つの池はいずれも江戸時代
に整備され、主に大名庭園の池だった。たった 4 つの
池からも様々なことが見えてきたが、東京にはもっと
異なった成り立ちの池もあるはずだ。

私たちモノづくりが、現代の過激な時代の潮流に吞
み込まれないためにも、また、次世代に引き継ぐ風景
を創出していけるように、情文では引き続き池巡りを
続け、機に応じてレポートや座談会などで発信してい
きたい所存だ。

（aaca 会報誌 2020.4. NO.87 掲載）

*18 世紀の第 1 次産業革命（機械の時代）→第 2 次産業革命（電力・電
子の時代）→第 3 次産業革命（コンピューターの時代）→第 4 次産業
革命（コネクテットの時代）→超スマート社会？

「市中の山居」を探るキーが “東京の池” に?! ①

情報文化研究委員会 元委員長 故 坂上直哉

一昨年（2018.11.30）、東京藝大で開催した当委員
会主催の座談会「市中の山居」は予想外の盛況で、後
日、次回を望む声が多く寄せられた。しかし、冷静に
振り返ってみると、「市中の山居」の核心には入って
いけなかったということが委員の一致した意見だっ
た。

＜心を揺籃した風景＞

そこで、情報文化研究委員会では、今後このテーマ
をどのように発展させていくかを話し合った。その結
果、まず、各委員が「心を育み、自身を優しく包み込
んだ大切な風景」を①思春期前と②大学以降（都市に
住み始めてから）の 2 つの側面から挙げてみようとい
うことになった。

春先の雪に芽吹く福寿草、裏路地、クローバーの原っ
ぱ、地域の生垣や桜並木、ジャズ喫茶、飲屋界限、海
辺の風景、磯溜まり、神社の階段…大切に思える様々
な風景が語られた。

ところが、どの委員の挙げた原風景も、今では既に
失われ、継承されていなかった。それどころか、各人
が東京に住み始めてからの「心を育てた風景」も大き
く変わってしまっていた事実、全員今更ながら愕然
とした。

東京は、日本は、世界は、目まぐるしく変化してい
る。江戸時代の変化速度が 1 キロとすると、現在は
80 ～ 100 キロのスピードで疾走しているそう。人
類史上、最も高速な環境変化の中に生きている。それ
は止まるどころか、今や第 3 次産業革命（コンピュー
ターの時代）* に入ろうとしている。モノのインター
ネット（IoT）、ロボット工学、AI など、新たな技術
が疾走し、さらに加速し、その先に遭遇する風景は霧
に包まれている。このように物と情報の関係が激変す
る状況下で「市中の山居」の意味するものは何だろう
か。

＜自然と繋がる風景＞

それぞれが挙げた「心を育てた風景」を注意深く見
ていくと、ほとんど建造物が挙げられていなかった。
一方、共通していたのは、どこか自然に繋がっている
風景だった。商人の町・堺で生まれた「市中の山居」。

「市中の山居」を探るキーが “東京の池”に?! ③

情報文化研究委員会 委員長 高橋圭太郎

aaca 情報文化研究委員会の発足者であり、長年委員長をされていた故 坂上直哉さんが提唱された、東京の過密都市空間に「市中の山居」を作るとは可能だろうか？このテーマで開かれた座談会（2018 年）は、大変興味深い命題であり多くの課題を投げかけ、残された我々に議論の尽きない一石を投じました。人工物だらけの都市空間において、人々の過ごした日常の記憶と、唯一無二の場所として、なくてはならない癒しの風景。坂上氏は、「心を育み、自身を優しく包み込んでくれた風景」と称し、言葉を残されています。いつまでも変わらないでいてほしい場所…。それこそが市中の山居ではないのか？ところが既に、我々を取り巻く都市の環境は目まぐるしくその姿を変え、「今は失われた風景」が多くを占めようとしています。

「市中の山居」とは何なのか？「都市の中で、自然とどのように一つになるかの方策」とも語られたその内容とは…？情報文化研究委員会の研究が始まりました。

委員の皆さんから伺った場所とは、「町の中屋さん」や、「ジャズ喫茶」「神田川」「路地裏」「野原のクローバー」「青山の大銀杏」「市ヶ谷の釣り堀」「出世の石段」「近所の喫茶店」「東京タワー」「六本木のライブハウス」「ゴールデン街」「九段下のお濠」等々と様々で、その時の「解」として「都会の喧騒からひと時逃れられるエスケープゾーン」そんな場所を指して語られた言葉ではないか？更に考察は白熱して、「人工物か自然物か…」的な話を経て、既に現実と符合していない膨らんだ記憶も重なり、心の中に鮮やかに映し出される素敵な映像を皆さんがモノローグとして大切にしてきた景色だと感じました。記憶の片隅に残る1枚の写真のような心像風景として見えてきたものは、何か特定の場所というよりも、一片の時間を切り取ったその時の記憶。時や天候、匂い、味覚、音、感情、登場人物…などなど。様々なとある日の機微を鮮明に思い出させ、記憶している小さな風景…。そんな風景にこそ心癒された記憶があることに気付かされました。

次に注目した切り口は、根源的な「場所の持つ力」ではないのかとの考えでした。人々が集まる場所というのは、潜在的、無意識下において人々を引き寄せる

力があり、必然的動機の成り立つ理由が存在するのではないか、という仮説です。中世における堺の街のように、利にかなった場所。海上交通の要所、商業の要地にして、商人たちの自由な自治権に守られ、富が集まり、その自由な風が世界中から人・物を集め、街を作り上げたのではないのでしょうか？人間の欲求を満たす場所として、多くの人々が集まる場所とはどんな場所なのか。大きな平地には大きな河川が流れ、台地と平地の境には道が引かれ、人々が移動する大きな道（後の街道）が発達していきました。多くの樹木を有する台地には豊富な地下水が流れ、崖線沿いには、清水が湧き出る場所が多くみられます。良い水がたくさんある場所に人々は集まり、町ができたでしょう…などと考えると、生命を引き寄せるマグネット的な要素に地形や自然の力は大きく関わってくるようです。

ここで初めて登場したのが「池」でした。池の多くは人工物であり、流れのある川とは少し趣が異なります。蛇行した川が取り残され「三日月湖」として成立するケースや、地形的に低地で、豊富な雨水が湿地を生み、成立した池も勿論あると思いますが、其方の呼び方は主に「沼」となります。池とはその有効性に気付き、人が作為的に「沼」を作りだした工作物。水は、田を潤し米を作り、食が人を集めて文化が生まれ



出世の石段



市ヶ谷の釣り堀

ました。集落はやがて村となり、町…都市へと変わったのだと思います。あらゆる生物は水が無ければ生きていけませんし、水辺には食を生産する力があり生命を引き寄せる潜在的な力が存在するようにも思えます。

「池」とは、自然を「写し」、人の持つ根源的な生物としての本能を刺激し、街中に居ながら自然を感じ取る唯一無二の場所でありました。

余白の無い大都会に残されたそれは、今昔を問わず



荒木町路地裏

経済性優先の社会において、密集地の高度土地利用という、行きつく先としてまずもって埋め立てられる定めなのかもしれません。

江戸の落語や浮世絵に登場する「神田お玉が池」や「赤坂溜池」「角筈十二社の池」など、あの不忍池ですら、明治期には湖畔を広く埋め立てられて田畑としたり、競馬場となったこともあったようです。

現在も、その存続を許され続けている希少な「池」にこそ、人の強い意志が働いた場所であり、現存する都心の「池」は選ばれた池に他なりません。選ばれた「池」にこそ連綿と続く人々の安寧への願いが内包されているのではないのでしょうか。現在、残された池の殆どが護岸化され、大雨などへの備えとして調整池の機能を持ち併せて、災害対策、治水的役割を担っています。温暖化の影響か、益々、激甚化する自然災害の脅威と対峙する大切な装置でもあります。

また、日本人の心の深層には、アミニズム的思想が流れ、「科学と自然、何方にも偏らず恵みを取りつくさず…」の考え方があり、自然と共生する思想に根源的な倫理観、美意識、死生観があると思います。

かつての池は、水面に観える不思議な「写し」の場所でもありました。水面に映る多彩な表情が人々を癒し、亡き人と邂逅させ輪廻を連想させました。

波紋の広がりとは集団で生きることが定めである人間社会の鬱積を溶かし、激烈な競争社会を最後の最後まで戦いながら生き抜く現代人にとって、「市中の山居」とは、何物にも代え難い美しき記憶とともに、これからも求め続けられる符号でしょうか。「市中の山居」を探す旅（考察）は、その根源的な理由を解き明かし、人の生きる力、「池」の持つ力を再認識する作業と至りました。

明かされた日本最古の池「飛鳥京跡苑池」1300 年前の姿は

「日本で初めて池を作ったのが蘇我馬子」。また、西暦 600 年頃奈良県飛鳥京で「苑池や都作りの土木工事を決めたのは斉明天皇、倭国の威信をかけて、池や水、石を取り入れた大規模土木工事で都を作った」と日本書紀に書かれている。飛鳥京は日本の国作りの始まり、飛鳥京跡苑池は飛鳥京宮殿の傍に造られた庭園の池。2000 年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を始めた。

跡苑池は南北 2 つに分かれ両池の深さが異り南池は深さ 2 m、北池約 4 m。深過ぎる北池の解明に 1300 年前の地下を電気探査で調査した。宮殿辺りは大きな地下水脈（水脈は 1000 年余経ても変化しない）があり、1 日 200 トンの水が通過し、池は深く透水性の層まで届いていた。地下では池水の増減時に水圧の作用で水が給排水され、特に排出機能に優れた北池は溜池目的ではと。隣接する飛鳥川は氾濫を繰り返し、跡苑池にも氾濫の破壊痕が発見され、また市中には約百ヶ所の水路遺跡もあり、豪雨時水路は排水道として北池に流れ込むのではと研究者達は想定した。しかし発掘から 21 年、最終報告では北池の治水明言はなかった。

その北池の地上では、新たに祭祀遺跡や渾々と湧き出る湧水部も発掘された。湧水は「聖なる水」を意味し、北池は、その水で天皇が「穢れを浄める」祭祀空間だった。元来日本は土着的精霊や自然を信仰するアニミズム、天皇の雨乞は水神は最も崇拝されたようだ。

一方の南池には、中国伝来の神仙思想を背景に、不老不死や仙人を表す「中島」が配され、百済や新羅の記録にも「飛鳥京苑地の南池に三神山の情景『島嶼』が築かれた」とある。仙薬の木々が植る南池は人智を超越した神仙境だった。唐や朝鮮半島の要人を招き、大陸に並ぶ国づくりで倭国を権威づけ、誇られても土木事業を成し遂げた女帝斉明天皇。石神遺跡の池でも発掘された須弥山石や石人像に噴水を凝らして、さぞ見事な迎賓館だったと想像に難くない。



北池 祭祀空間（資料提供・奈良県立橿原考古学研究所）



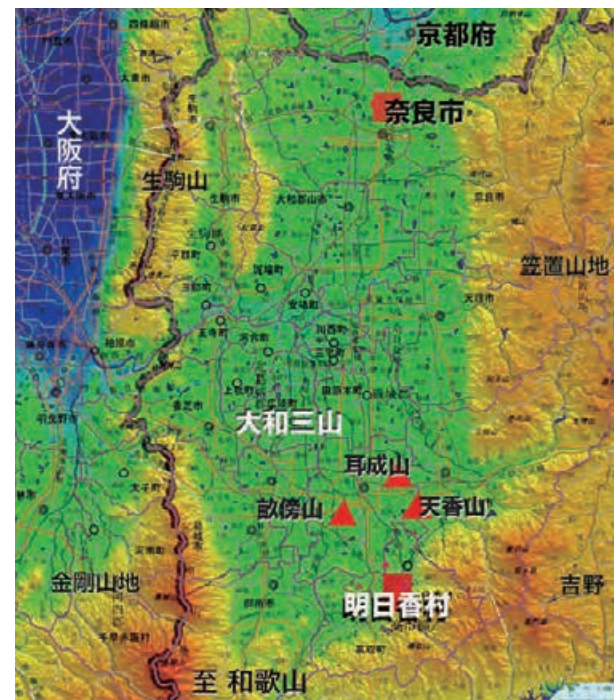
飛鳥京跡苑池図
（資料提供・奈良県立橿原考古学研究所）



南池 神仙思想池（イメージ画・資料提供・奈良県立橿原考古学研究所）

歴史を紐解けば飛鳥時代は 6 世紀頃から約 120 年続き 9 人の天皇が即位した。従来天皇譲位は遷都がしきたり、しかし 5 人の天皇は飛鳥で宮殿を設け政治も行った。飛鳥は三方山（大和三山）に囲まれ飛鳥川も近く防衛上も利点だった。文化面では『隣国から献上された仏像の顔が美しい』美の崇拜から仏教文化や寺院の建設技術、学問、芸術なども伝来した」と日本書紀にある。

世は豪族中心、崇仏蘇我氏と排仏物部氏は神仏祭祀法や天皇擁立など対立が激化し、混乱収束のため聖徳太子を摂政として日本初の女帝推古天皇が即位した。後年聖徳太子亡き後、蘇我氏は朝廷を掌握し舒明天皇は傀儡政権となり、皇極天皇（後の斉明天皇・重祚し二度即位）即位後乙巳の変で、中大兄皇子（後の天智天皇）と中臣鎌足（後の藤原鎌足）は蘇我氏を滅亡させた。歴史は大化の改新に入り政治は天皇中心体制となり、称号は大王から「天皇」、国号は「日本」、年号は「大化」に定められた。飛鳥時代、日本の黎明期を築いた 4 人の女帝、国難を巫女的立場で政局を操り、強靱で盤石な日本国づくりを牽引した。そして世は持統天皇期（藤原時代）律令国家が始まった。



奈良県地図（出典・国土地理院）

飛鳥、長閑な田園風景が広がり、遠近で石の遺跡が目に見えてくる。聖徳太子が生まれた橘寺や、蘇我馬子が建てた飛鳥寺、馬子の墓と思われる石舞台は観光地と化し賑わう。自転車で回れば半日程で見学できる。

奈良に居住した半世紀ほど前、飛鳥はまだ多くの主役たちは土の中に眠り、また「石舞台」も咲き誇る蓮華に包まれ静寂の墓跡だった。蓮華は蓮の花にも似ていることから『私の幸福』あなたと一緒になら苦痛が和らぐ」無骨な巨石とも似合わない花言葉に、1300 年昔の強者も心穏やかに眠っているのだろうと、そして発掘され歴史書から表舞台に出た飛鳥京跡苑池、いずれ復元され古都の古を語るだろう。

（情報文化研究委員会 置鮎早智枝）

平安から伝わる市中の山居「浄瑠璃寺の池」

浄瑠璃寺というお寺に惹かれたのは、情報文化研究委員会の委員であり、ご意見番としてご活躍中の、奈良県在住・大田敏彦さんの推薦があったからです。「とにかく素敵なお寺だから一度観てきなさい…。私の一番好きなお寺だから。」と勧められたことに始まります。

ガイドブックによると、この場所は京都の最南端で奈良との境に位置し、南都・奈良仏教界の大寺の僧侶達が俗世の喧騒を離れ修養、研鑽を積んだ聖地として、「小田原別所」と呼ばれていた、と書かれていました。

察しの良い方はお気付きの通り、市中の喧騒から逃れ心癒される場所を求める、「市中の山居」なる思想が生まれたのは室町時代後期の茶の湯の言葉とされています。「小田原別所」が尊ばれたのは、遥か以

前の奈良時代のお話で、既に大寺が乱立していた時代、人々を浄土へ導く勤めの僧侶という世界においても、その争いは人間の性からは逃れられないことを如実に物語っているのかと面白くなってしまいました。

その後、真言律宗の“浄瑠璃寺”として、平安末期の1147年に創建。薬師如来仏を本尊としたことから、浄土を示した浄瑠璃世界がお寺の名の由来となったそうです。実際の印象ですが、山深い自然に囲まれた本堂は周辺の草木に溶け込み、質素で飾らない造りに、美しい瑠璃色の桔梗や紫の蓮の華が瑞々しさを添えていました。

中央には宝池を置き、西に本堂と九体の阿弥陀仏。対岸の東側には三重塔と薬師仏が配置され、(ここでは割愛するが、北側の南を向いている大日如来像と灌頂堂(かんじょうどう)を含む3つの堂塔が祀られている)この配置こそ、浄土を模した池の配置だと考えられます。

本堂側を「彼岸」、三重塔のある対岸を「此岸」と呼んで、太陽の昇る東方向に浄瑠璃浄土があるとされ薬師如来佛が配置され、人々の苦悩を救い西方浄土へ送り出す遣送仏があり、また、対岸の太陽が沈む西方には極楽浄土が在るとして阿弥陀如来が配置されています。

来訪者は、東側から池を挟んで西方に配置する阿弥陀仏をみて、彼岸の世界へ迎えてくれる来迎仏を拝み、

浄土と現世を体感できる仕組みとなっています。このレイアウトは、平等院や、藤原道長が建てたと言われる法成寺(廃寺)と同じ配置をしているとされ、春分、秋分、彼岸の中日には、九体仏の中尊、来訪印の阿弥陀仏後方に日が沈んでいくように設計されているそうです。「市中の山居」という思想が生まれる、遥か以前から、瑠璃色の草花と見事な蓮池はまさに極楽浄土を彷彿させるに相応しい空間をつくり上げて人々を癒していたようです。(情報文化研究委員会 高橋圭太郎)



浄瑠璃寺 全景



浄瑠璃寺の池

現代の「市中の山居」 — 3つの池を考える —

「市中の山居」を探る3つの池

情報文化研究委員会 副委員長 栗田 祥弘

長く人の心に残るもの。時代が変わっても生き続けるもの。心象風景。そのような普遍性のあるスペシャルな場に人々は心を躍らせ、時代に合った文化を創り続けてきた。様々な過渡期、変換点を迎えている今の時代において、改めてこの「変わらないもの」への理解を深めることで未来に対する正当な投資ができるのではないだろうか。

日本の都市部は、近年大都市であるメトロポリスがつながりメガロポリスと呼ばれる超高密度巨大都市群となってきた。それが短時間の間に急速に作られていった。周辺の風景が急速に変わるなか、人の心に残り続けている変わらないものは何であろうかと議論を持ち寄った。そこで出てきたものは「池」であったり「森」であったり「山」の景色だったり、構築物だと東京タワーなどだった。建築などの人工物よりも自然を感じさせるもののほうが多かったのが印象的であった。この議論は正式な調査ではないし、年齢や感性の偏った人たちの意見でしかないが、そこから感じられるのは、特に都市部において「自然」という「変わらないもの」を求め、心象風景の記憶に焼き付けているように感じる。

高密度な都市の中に「自然」を求めるという考え方は昔からあったようだ。そのひとつに「市中の山居」という言葉がある。直訳すると「都市に山の住処をつ



メガロポリスの超高密度巨大都市群

くること」となるが、もう少し広くとらえるのであればこのようにも読めないだろうか。

「市中の山居」とは「都市の中で自然とどのようにつながるかの方策。都市の中にあり、人工的文化的でありながら、自然とつながっているところを指す。」

自然との繋がりは、時として災害という負の恩恵も少なくなかった。歴史の中で様々な事業が行われた結果、人の住める場所を作っていった経緯が日本にはある。近代に入りその動きはより急速に、より合理的になっていった。その結果作られたのがカミソリ堤防であったり、渋谷川などの河川や雨水貯留槽の暗渠化や垂直コンクリート護岸に落下防止の大型フェンスが取り付けられた調整池であったりした。近代において高度経済成長の中、人が生活するために自然と距離を置く方法を近代日本の都市計画では行ってきたように思う。21世紀になり、人口減少や成熟社会、SDGsなど

の議論も声高にされるようになってくると、人々はまた自然と寄り添って生きていきたいという思いが強くなっているのかもしれない。

非日常時の災害時対策は考えながら、日常時は都市部でももっと自然と繋がって生活したいという現代人のささやかな願いが生まれている。このような実例はどのようなものがあるだろうか。調べていくと「池」、特に水害対策としての機能をもつ土木工作物である「調整池」や「調節池」が人や社会とつながる形で新しく作られているものがあることに気づいた。それが新しい都市や社会をつくるにあたって大きな価値や可能性を示し始めていると分かった。今までイメージされてきた垂直コンクリート護岸の荒々しい人の気配のない土木工作物の池が、都市の中心となり水害対策も施しながら生態系にも寄与する「人の居場所」になる場所へと新しく変貌し複合化し始めている。以下に情報文化研究委員会で現地調査を行った3つの池を紹介する。

〈柏の葉キャンパス・アクアテラス〉

1つ目は千葉県柏市に作られた柏の葉キャンパス内に作られたアクアテラスと呼ばれる調整池。柏の葉キャンパス駅周辺で進む「柏北部中央地区一体型特定土地区画整理事業」（2000年）の一部として整備された従来型の調整池を、大規模改修して2016年に一般公開された親水公園。調整池が持つ空間資源としての可能性に着目し、「見るだけの池から触れ合える水辺へー治水機能と親水性を両立した多様で寛容なパブリックスペースの創出」をテーマとした。まちづくりを推進するUDCK（柏の葉アーバンデザインセンター）と、公共（区画整理事業者：千葉県、管理者：柏市）と民間事業者（三井不動産を主とする周辺地権者）の連携による高質化を実現。1.8mのフェンスは無くし、手摺りのデザインも軽やかにし、水辺との境界は植物を設けることで人工的な手摺りを無くす工夫をしている。

〈越谷レイクタウン 大相模調節池〉

2つ目は埼玉県越谷市にある大相模（おおさがみ）調節池。UR都市再生機構が埼玉県の同意を得て越谷レイクタウンの地区中央に設置した池である。越谷市が推進する地区整備事業である越谷レイクタウン事業の一環として施工され（1996年に特定土地区画整備事業決定、2008年に町開き）、「新しく水と共存文化を創造する都市」をスローガンに、水害対策を考慮しながら地域住民の憩いの場として池の一部を開放し自由に利用できるようになっている。元荒川と接続して

水害時の河川の水量を調節する機能を持つが、平常時も一定の水量を入れることで池の水質を保ちビオトープ機能も持つ。垂直護岸は最小限になり、1.8mのフェンスも低めのフェンスに代わり景観には一定の配慮をおこなっている。水辺の地域活動としてはフェスとして「Lake and Peace」、アクティビティやキャンプ体験として「越谷技博」、「レイクタウンランニング」や「越谷いちごラン」なども行われている。

〈高ヶ坂松葉調整池〉

3つ目は東京都町田市の住宅街にある高ヶ坂の松葉調整池。通称「めだか池」。1998年の区画整理事業により築造された調整池を、1999年環境庁所管「自然共生型地域づくり事業」の補助を得て、豊富な湧水を活かしビオトープとして整備した。垂直コンクリート護岸と1.8mのフェンスで囲まれた池だが、ビオトープ機能を維持するために最低保水量を確保できる仕組みとし、地域住民やNPO法人（鶴見川源流ネットワーク）が自発的に清掃活動や自然観察会などを行っている。

新しく都市をつくる中で、高密度に建築を埋めるだけではない解決案が出てきていると感じる。「自然」を大胆に取り込んだ安全なまちを人々が望んでいるのかもしれない。今回の3つの池は防災と自然という複合用途に人の居場所を設けている。土木と建築と美術が境界を越えて市中の山居を創っている例ではないだろうか。建築美術工芸協会は様々な分野や領域を超えて未来を語る場にしたいと考えている。これからの未来は、縦に区切られた領域をもっともっと横につなげていくことが必要とされている。これらの実例を踏まえて、未来の新しい都市の在り方を、境界を越えて探っていく一助にしたい。



市中の山居 待庵（千利休）



フェンスで囲まれた一般的調整池

柏の葉・アクアテラス



アクアテラスと商業施設

情文研とアクアテラスの出会い

2018年11月30日、aaca日本建築美術工芸協会30周年記念事業として開かれた「市中の山居」ー土木・ランドスケープ・建築・アートからのアプローチと題した座談会で、登壇者の1人であった、オンサイト計画設計事務所・ランドスケープアーキテクトの三谷徹氏のお話から「柏の葉アクアテラス」の存在を知ることとなりました。

同氏の「駅前を緑で一杯にしたい…」と語る情熱的な思いと、「ゆっくりつくるものほど間違いはない」と心に刻まれた言葉には、理性的で哲学的な発言の対比に、驚きと深い興味を感じました。

産学官が郊外に作る新しい学園都市に選んだ地は、「現代の市中の山居」理想郷とも思える…緑豊かな静かで水辺のある土地だったようです。

(情報文化研究委員会 高橋圭太郎)

柏の葉アクアテラスは、つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅周辺で進む「柏北部中央地区一体型特定土地区画整理事業」で整備された従来型の調整池を、憩いの場となる親水空間へと整備を行ったものです。

駅から周辺へと開発が進むなか、調整池がもつ空間資源としての可能性に着目し、「見るだけの池から触れ合える水辺へ」をテーマに、まちづくりを推進する柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)を中心とした、公共(区画整理事業者:千葉県、管理者:柏市)と民間(三井不動産株式会社を主とする周辺地権者)の連携により高質化を実現したものです。

(柏市ホームページより)

所在地 千葉県柏市
つくばエクスプレス柏の葉駅キャンパス駅下車
面積 約240,000㎡(イノベーションキャンパス)
約23,753㎡(アクアテラス)
調整池容量 73,721㎡
調整池外周 約800m
竣工 2016年

UDCK 出口 敦センター長 インタビュー

情報文化研究委員会として「市中の山居の未来」をテーマに、将来の都市環境が人や自然とどのようにつながっていくのかを研究している。未来のまちは非日常の災害に対応しながら、日常には人が憩いたむのできる場を核とした個性のある場になって欲しいと考える。それを考える上で、千葉県にある柏の葉キャンパス・アクアテラスのまちづくりは調整池を活用して、災害対策も親水デザインも積極的におこなわれている。UDCK(柏の葉アーバンデザインセンター)センター長であり東京大学大学院新領域創成科学研究科教授である出口敦氏に、東京大学本郷キャンパスにて対面インタビューをおこなった。

出口:調整池の計画は、九州大学で働いていた18年間でキャンパス移転計画を任せられた時にたくさん経験しました。九州大学伊都(いと)キャンパスの敷地は、みかん畑などであった丘陵地を270ha開発したもので、11~12ヶ所の調整池を必要としました。大雨が降った時に一時的に河川へ水が流れ過ぎないように計画された調整池で、全て計算に基づいて大きさと位置が決められており、後からでは容易には変えられない仕組みでした。

2011年に東京大学へ来たのですが、柏の葉のまちづくりに関わり始めたのはその頃からです。柏の葉の話をする前に都市間鉄道の「つくばエクスプレス」について説明が必要です。筑波と東京をつなぐこの鉄道を計画するにあたって、沿線を土地区画整理事業として開発する方法を取りました。そのためにつくばエクスプレス沿線には多くの調整池が区画整理の開発と共に生まれました。

柏の葉は明治時代の開拓に三井財閥がかかわられ、開拓前は馬の牧場でした。その場所がゴルフ場となり、柏の葉キャンパス駅周辺地区の一部となりました。大雨の時に下水道に流れ込む大量の水をいったん調整池で受け止めて、その後下流の川へ流していきます。調整池は一般的にはコンクリートによる垂直護岸になるケースが多く、柏の葉キャンパス駅から近い大規模な調整池は何かしたいと三井不動産の当時の菰田(こもだ)社長とも話をしました。

池を中心とした都市開発の事例としてロンドンの

チェズウィックパーク(Chiswick Park)が挙げられます。建築家のリチャード・ロジャースが設計したエリアで、調整池ではないですが中央の池を建築が取り囲む良いデザインです。チェズウィックパークを1つの参考例として、調整池を水辺にみたてて整備を進めることになりました。

ここで問題が出てくるのが池の管理方法でした。良い環境を維持するためには新しい管理スキームが必要でした。まず協議会をつくり、水辺空間をつくることで地権者に受益者負担として管理費用の一部の負担をお願いしました。それを基にUDCKが柏市と管理協定を結ぶこととしました。その時に、UDCKと柏市とで管理する境界線を明確にした上で取り組みました。最終的には「UDCKタウンマネジメント」という一般社団法人が、管理運営を担っています。まちは時代と共に変わります。変化できるまちだけが生き残ります。デザインだけでなく「仕組み」も考えていかないと「池」を活用した素敵な環境はつくり出せないと考えています。



街なみとアクアテラス



UDCK に展示されているアクアテラス周辺模型

置鮎：多摩ニュータウンに住んだ経験から、新しくできた都市になかなか期待ができません。柏の葉キャンパスも同じようにならないか心配しています。最近では都市には光の部分とともに多様な影の部分も作っていかなくてはいけないのではないかと考えるようになりました。

出口：多摩ニュータウンに関しては、まず時代背景の理解が必要かと思います。当時の高度成長時代では早急に住宅地をつくらなければなりませんでした。早く住宅地をつくるのが良いことだとも思われていた時代でした。そこから学んだことは、「まちは早くつくると早く衰退する」でした。できるだけ長い時間をかけて丁寧に開発していけば良いのですが、大量の財政支出をして何十年、何百年と時間をかけるとなると、お金も根気も続きません。「都市は時代のマーケットに関連してつくられる」ということは必然です。マーケットは無視できません。タイミングとマーケットをうまく考えながら多様なワクワク感や楽しさのあるまちをつくり、一方で持続性にも配慮していくという難しい課題が常にあります。

人口減少が進む未来において、まちが衰退することで社会と接点をもてなくなっていく場所が増えていきます。例えば商店街でシャッター店舗がでてきたり、使われない空地ができてたりするでしょう。これからの

人々はその「社会と接点を持てなくなった場所」を、過去と違う形で社会と接点を持たせる工夫を見つけていかなければなりません。自然に戻すことも含めてその「場所」と「人」「社会」をつなげる役割が求められるでしょう。その力があるのは実は「アート」の分野なのかもしれません。

(情報文化研究委員会 栗田 祥弘)

出口 敦

1961 年 東京都生まれ
1990 年 東京大学大学院博士課程修了（工学博士）
1993 年 九州大学助教授
2006 年 同大学教授
2011 年～ 東京大学大学院新領域創生科学研究科教授
2021 ～ 22 年 同大学大学院研究科長
2024 年～ 同大学執行役・副学長
2011 年～ UDCK センター長

インタビュー 2022 年 12 月 22 日

(東京大学 本郷キャンパス)

メンバー 尾崎元担当理事、露口前委員長、高橋委員長
栗田副委員長、雨山智子、置鮎早智枝

オブザーバー 七字祐介

UDCK 鈴木弘樹ディレクターインタビュー

情報文化研究委員会として「市中の山居の未来」をテーマに、将来の都市環境が人や自然とどのようにつながっていくのかを研究している。未来のまちは非日常の災害に対応しながら、日常には人が憩いたむのできる場を核とした個性のある場になって欲しいと考える。それを考える上で、千葉県にある柏の葉キャンパス・アクアテラスのまちづくりは調整池を活用して、災害対策も親水デザインも積極的にこなわれている。この計画に当初から関わっていた UDCK（アーバンデザインセンター柏の葉）ディレクターであり千葉大学准教授である鈴木弘樹氏にリモートによるインタビューをおこなった。

鈴木：柏の葉キャンパスの池は、千葉県がおこなった全体開発の中で新しくつくられた調整池でした。ゴルフ場から造成され仮の調整池を作られた状態でしばらく放置されていたため、この調整池を自然型の人のつどえるものにしようということで話が進みました。先に通常の調整池をしっかり作られていたら今のアクアテラスのようなものはできなかったと思います。UDCK の初代センター長である故北沢猛氏と当時柏市長だった故本多晃氏が意気投合して、三井不動産を巻き込んで計画を進めていきました。

UDCK としては水辺空間と先進的なまちづくりの視察としてアメリカ・オレゴン州のポートランドへ皆で行きました。特に注目したのは都市再生の成功事例として注目されるパール・ディストリクトで一体的に開発された公園のひとつであるタナー・スプリングス・パーク（Tanner Springs Park）でした。(https://parkful.net/2018/04/go-to-portland-05/)

環境保全、防災対策、アート発信、歴史の継承、市民の憩いなど様々な価値を作り出していました。このポートランドの計画に携わった日本人がいて、その方にもプロジェクトに参加してもらい水辺空間を計画していきました。

都市計画のルールとして、まちの 1 階部分（特に水辺に面する建築）はオープンな構造とし、人が出入りでき憩える場としました。（これは越谷レイクタウンのイオンなどの店舗ではできていない部分である）調整池のルールとしては、災害時に基準の水が確保できれば良いので、障害物となるような物が水辺や水中に

あっても、その水量を確保できるのであればいろいろと付け加えることができます。アクアテラス内にある象の鼻のような長細いでっぱりは、そのような理由で OK になっています。ですから調整池の中に島を作ることも可能です。

栗田：アクアテラスでどうしてもできなかったことはありましたか？

鈴木：管理の関係で、池の底を「土」ではなく「コンクリート」で固めなくてはならないということがどうしても覆すことができませんでした。自然環境をつくっていくということで、できれば「土」の底で池を作りたかったです。

一般的に調整池に取り付けられる 1.8m のフェンスは、自然型の新しい調整池をデザインするという方向性になった段階で、特に大きな抵抗もなく取り外しの OK ができました。池の管理を UDCK でおこなうということもあったかもしれません。

露口：柏の葉キャンパスの都市計画は、ビジョンをもって議論されてきたとのことですが、アクアテラスの調整池に関わる部分でどのようなビジョンを持たれていたか教えてもらえませんか。

鈴木：ビジョンとしては「柏の葉国際キャンパスタウン構想 8 つの目標」を掲げています。その中でも「目標 1：環境と共生する田園都市づくり」と「目標 7：質の高い都市空間のデザイン」が大きな目標になっています。「緑・水・空」を享受できる都市デザインを田園都市づくりとしてきました。

大田：初代センター長である北沢さんの考え方が、一過性のものではないこれからの考え方として柏の葉キャンパス・アクアテラスにも大きく影響していると思いますが、如何でしょうか。

鈴木：北沢先生の考え方の影響は非常に大きく、北沢先生がいなければ柏の葉キャンパスのプロジェクト自体なかったかもしれません。まちづくりは時間がかかるものですが、行政の役人は 2 ～ 3 年おきに配置換えをするため長く関わることはできません。そこでアーバンデザインセンター柏の葉という組織を作って、大学などの教育機関の人々に関わらせたのは正しかったのではないかと思います。教員はそんなに簡単に変わったりしないため長くそのまちと付き合っていくことになります。そのような仕組みも含めて影響力

は大きかったです。

雨山：今回見せていただいたアクアテラスの写真は全て人が入っている写真で、より「まち」を感じることができました。

置鮎：アクアテラスを現地視察した時に感じたのは、新しいまちは建物がどれも同じに見えて、そのまちの個性をなかなか感じることができませんでした。もう少しなんとかならないのでしょうか。

鈴木：まちにある「光と影」の部分で、計画では「光」の優等生な部分をどうしてもフォーカスされがちです。「影」という言葉が正しい言葉分かりませんが、もう少し人間味があふれた場も作っていかねければいけないと思って高架下に「かけだし横丁」という 20 店舗程度が集まる飲食店街を計画しました。このような生々しい場所をもっと考えていかねばならないというのは、今後の都市計画の課題かと思います。

栗田：都市計画はまちの開発が終わった時がゴールになりがちですが、その後も人や時代はどんどん変わっていきます。開発終了後の展開として配慮した点などありましたら教えてください。



つくばエクスプレス高架橋とアクアテラス

鈴木：ニュータウンでの失敗例として、開発されたタイミングで入居された人たちがそのまま高齢になっていき、まちの年齢層が固定化されて新しい年齢層が入りにくいということがありました。その反省点から、集合住宅は賃貸を多くし循環しやすいように配慮しました。また大学の研究機関も多いのでそこでも循環し入れ替わりがしやすいのではないかと思います。

(情報文化研究委員会 栗田祥弘)

鈴木弘樹

東京電機大学工学部第一建築学科卒業

東京電機大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了

栗生総合計画事務所

博士（工学） 東京大学

千葉大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻 准教授

UDCK ディレクター

インタビュー 2022 年 12 月 1 日（リモート）

メンバー 露口前委員長、高橋委員長、栗田副委員長

雨山智子、大田敏彦、置鮎早智枝

オブザーバー 七字祐介

現代の「市中の山居」—3つの池を考える—②

越谷レイクタウン 大相模調節池



大相模調節池

越谷市民の情熱とまちづくり

越谷レイクタウンは、一面湿地だった場所に忽然と生まれた歴史の浅い現代の「まち」である。巨大な水辺を抱えた「まち」をつくるということは、近代以降の高密度・高効率性が求められる都市計画において、当時は相当異例なものだったと想像する。オランダのアムステルダムは運河が張り巡らされたまちだったが、車の交通を入れるため半分の運河を道路にした。他にも多くのまちが高密度・高効率の名の下に水辺を減らした歴史がある。未来の市中の山居を考える上で、越谷レイクタウンのまちづくりは大変興味深い。計画段階で実現できなかったことを、越谷市民が時間をかけて良いものにしていくボトムアップ型の運動が起こっている。理想のまちづくりに近づけるために、越谷市民がこれからどのように動いていくのか。そこに未来のまちのあるべき姿が見えるかもしれない。

(情報文化研究委員会 栗田祥弘)

同地域に流れる元荒川の治水を目的とした調節池。明治から昭和初期に存在した大相模村から大相模（おおさがみ）調節池と称する。面積は約 40 ha で不忍池の約 3 倍に相当する。周辺は遊歩道や棧橋などが整備され、毎年 11 月にイオンレイクタウンへ出店するゼビオグループヴィクトリアが主催する越谷レイクタウンランニングが開催され、池でヨットやカヌーが練習する。

駅から周辺へと開発が進むなか、調節池がもつ空間資源としての可能性に着目し、「見るだけの池から触れ合える水辺へ」面積約 40ha、深さ最大約 5m の調節池が完成し、120 万立方メートル（東京ドームと同程度）の水を受け入れることが可能となった。（Weblio 辞書 より）

所在地 埼玉県越谷市

JR 東日本 武蔵野線越谷レイクタウン駅下車

街開き 2008 年

レイクタウン駅開業

イオンレイクタウン開業

越谷レイクタウン・大相模調節池 越谷市開発担当者 大島 健氏に聞く

2008 年 4 月に「まち開きオープニングフェスタ」をおこなった越谷レイクタウンは、埼玉県越谷市の田園地帯に洪水調節池と新市街地を合わせて計画した大プロジェクトでした。形状は池に対して地面が突き出すようなペニンシュラ型（半島型）をしています。しかし越谷レイクタウン整備事業の最初の案は、現在の姿とはまったく違う形をしていました。今回はこの形の開発にいたるまでの話をさせていただきます。

現在の姿とは違う形の当初案

越谷のこの計画地周辺は土地が低い場所でした。ちょっと雨が降ると浸水被害が出て、1982 年、1986 年には胸位まで水がきました。1 階部分は全部浸水して、地域住民の財産も大変なことになりました。水を抑えるのにはどうしたらよいかを議論した結果、雨水が一斉に流れ込む「中川の負担」を軽減するのが効果的だとわかりました。中川の負担を減らすために、調節池を造る、川幅を広げる、ということが計画されました。

1984 年から 1988 年にかけて、当時の島村慎市郎市長を先頭に、黒川洸先生（筑波大学・東京工業大学名誉教授）や岸井隆幸先生（日本大学名誉教授）などの有識者を集めて「リヴレーヌ（水辺）」という検討会議が開かれ、調節池をつくることに合わせて「どういうまちを創っていききたいのか」を多方面から検討いただきました。その越谷南部地域開発計画に地域を合わせてパースを作ったのが最初の案になります。これを見ると中心形状がアイランド型（島型）なのです。オフィス、IT、ホテルなどを中心に集めて、その周りに池を造り、さらに外周に住宅を造る計画でした。この絵ができるまでに、リヴレーヌ調査チームでドイツ、アメリカ、オーストラリアなどの水辺を生かした街づくりを調べました。

その当時は、富士見市など他にも候補地はあったのですが、1988 年には正式に建設省の新規事業計画に

レイクタウン整備事業として採択いただきました。実際のところ、事業主体は埼玉県や住都公団ですが、河川事業や土地区画整理事業を一体で行う事業となります。そういう意味では、普通の調節池を造るのとはわけが違います。レイクタウン整備事業を進める上で、やはり国、当時の建設省補助金に関係してきます。事業規模も大きくなり、最終的には約 897 億円になりました。越谷市としては、1988 年に都市施設部に都市整備推進室というプロジェクトチームを作りました。私も企画財政担当を経験したことから、このチームに加わった次第です。国と埼玉県、住都公団、越谷市が進める大プロジェクトでした。

地権者との折衝

その当時対象となった地域に土地をお持ちの方が 1000 人程いました。その人たちに「レイクタウンってどういう事業？」という説明が必要でした。ご理解いただかないと成立しない大変な仕事でした。対象地域の相模町、大成町、東町、川柳町に加えて地域外の連絡協議会をつくっていただき、説明させていただきました。個別にも毎日のように権利者のお宅を訪問させていただき「レイクタウン事業はこのような事業です。一緒に取り組みましょう！」と口説いて回りました。

ただ単に調節池を造るとなると、土地を全部売っていただかなければならなくなります。それでは権利者に一時的にはお金は入りますが、それで終わってしまいます。権利を残させていただくために、土地区画整理事業と河川事業を併用する事業として計画した訳です。土地を買収するのではなく、「換地」として、地権者に権利が残る。減歩という手法で公共施設や事業



越谷レイクタウン事業 初期案（模型）

費に充てますが、土地が減ることに対しての理解を得ることが難しいところでもありました。

今回の土地区画整理事業は大変大きいため、なかなかイメージが共有できませんでした。そこで大きな模型を作りました。1989 年にアーバンインフラテクノロジー推進会議が第 1 回展示会として幕張メッセで「国際インフラテック 89」というイベントを開催しました。このイベントに模型を展示しました。この模型によって地権者の理解も深まりました。

夢の計画「越谷レイクタウン」

昔の越谷は「水郷こしがや」と言われた水運のまちでした。藤助河岸（とうすけかし）などの多くの河岸が栄えていたようです。その時代、米なんかを大量に運ぶ手段は舟でした。この辺は古い旧家さんもあり舟をもち、煉瓦の倉庫も建てており、まさに水運のまちだったのです。それらの歴史的特徴も踏まえて計画が進みました。

池のまわりには水辺にすぐ出られるような戸建て住宅を計画。敷地規模を最低 200㎡以上と広く計画し、庭付き舟付きの広い住宅として考えました。当時はそういう住宅に住んでいただければと考えました。当時の模型には中川に出られるように計画されていて「東京湾から中川を上がってくれば、ここにヨットなどを停泊して行き来できる」と考えていたわけです。かつての水運を取り入れた夢のある構想でした。渋滞ありませんので、たまには船で東京に遊びに行くこともできる。武蔵野線なんかは、ヨットを通す目的で橋桁が少し高くなっているのです。

まちの将来を考えて、ここにはベッドタウンだけでなく職住一体を考え働く場所などを中心にすえました。285ha の真ん中にあるのが鉄道で JR 武蔵野線の新駅です。駅の両側には当時インテリジェントシティと呼ばれていた IT 系ビルやホテルなどを計画しました。東側には高速道路が走っていますが、これは東埼玉道路です。事業認可もいただきました。

このアーバン・インフラテクノロジーの展示会は非常に好評で、たくさんのお客さんに観ていただきました。「海辺でもないのにこういう都市が内陸にできるの？」と大した反響でした。それまでの越谷では水は迷惑なものでしたからね。

レイクタウン整備事業には反対意見もありました。専業農家さんが多いある地区では協議会も脱会されて解散してしまいました。これには故島村市長も困ってしまい、最終的に 285ha から 235ha（東埼玉道路含む）という数字でまとめ直しました。池の調節容量も 200 万トンから 120 万トン、池の面積も 60ha から 40ha

に減らしました。それと同時に予算の見直しもおこなわれました。見積額が大幅に超過していたこともあり、アイランド型をやめ、現在のペニンシュラ型に変更し、夢の水運利用も減額のために諦めることとなりました。

当初の計画とはだいぶ形は変わってしまいました。が、「水辺を生かそう」という考え方は踏襲されました。常時水が溜まる部分の水深を 1.5 m 程度として、大雨の降雨時にはその上に 3 m ～ 3.5 m の調節容量があるように考え、40ha であれば 120 万トンの容量が取れるのです。

水しかない越谷、逆転の発想

通常の区画整理では、調節池は周囲をコンクリートで固めてフェンスで人が入れないようにします。故島村市長はそれをやめて人が入れる場所にして、そこに住宅や事業系の施設を配置するといった親水性のある使い方を提案しました。このアイデアを地権者や市民に理解いただけたことが早期完成の一因かと思えます。新市街地と洪水調節池。今までは別々に計画されてきたものですが「人と水との新たな調和」というテーマで一体的に計画が進みました。

故島村市長はそういう発想力のある方だったので



1989 年 1 月 1 日広報「こしがや」NO.819 号

す。越谷にある物と言え、水しかありません。地形的には山もなければ、海もない。レイクタウンでは、その「水」をうまく活用するために、調節池を中心に逆転の発想でまちづくりを進めたのでした。

水質については、最初のリヴレーヌ検討会議でも計画を練りました。この調節池は、全部コンクリートで底を造ってはいません。底では土壌に水が浸み込み、湧いてくる。そうすることで水質浄化も進みます。さらに3日で全部の池の水が入れ替わる循環システムを取り入れたり、噴水も計画しました。水質は下流、中流域としては相当良質に保たれていると思います。

新しい世代に託すレイクタウン

1988年に国の新規事業に採択されてから、ちょうど20年の2008年。越谷レイクタウンが「まち開き」しました。同時期に「街づくりフォーラム」も開催し、黒川洸先生に「水辺と環境共生」という記念講演をしていただきました。同年10月にはいよいよイオンレイクタウンがグランドオープンして、アウトレットなどもできました。

JR武蔵野線に新しく越谷レイクタウン駅ができたのですが、これは越谷市がJRに「駅をつくってください」と要望してできた請願駅です。そういった場合は全額自治体負担。この駅の場合、市と都市再生機構（住都公団）が折半負担したのです。これは駅舎だけでなく時刻表から掲示板に至るまで全部入るのです。こういう駅をつくるにあたり、補助金もあるのですが、最終的な市の負担額は確か15億円だったかと思います。現在イオンレイクタウンを訪れるお客様は、

年間5000万人以上と言われていますから、車もあるのでその半分としても年間2500万人は鉄道を利用する計算になります。1人が往復に1000円使ったとしても250億円。だから武蔵野線はレイクタウン事業のおかげで、正にドル箱路線となっているのではないのでしょうか。

「越谷は特色がありませんので、レイクタウンは越谷の目玉として通常考え方ではない新たな発想をしていかなきゃならない」と故島村市長と話したことがあるのです。まさに元市長の情熱を感じますし、越谷の大切な財産として活用していかなければならないと思っています。最近は越谷市民やイオンが積極的にレイクタウンの水辺環境を生かすイベントやワークショップなどをおこなっているようです。当初の案とは変わりましたが、この水辺をいかしたまちづくりを若い世代に進めてもらいたいと思います。

（情報文化研究委員会 栗田祥弘）

大島 健

元越谷市役所企画課、財政課勤務

越谷レイクタウン事業では担当主査で後に企画部長も務める

現在高元建設株式会社管理本部社長室室長

インタビュー 2022年12月8日（リモート）

メンバー 露口前委員長、高橋委員長、栗田副委員長

雨山智子、大田敏彦、置鮎早智枝

オブザーバー 七字祐介

越谷レイクタウンで市民活動をしている 畔上順平氏、藤田 融氏に聞く

越谷市は人口がおよそ34万人いるのですが（インタビュー時：2023年）、その市内南部に“越谷レイクタウン”という全く新しいまちが15年程前の2008年に突然できました。何にもなかった場所なので、市民の間では期待感や注目度が上がる出来事でした。イオンレイクタウンという国内でも最大のショッピングモールが作られ、年間で5000万人以上の来場者があると言われています。越谷は景勝地ではありませんし、何か特別な名産品や観光資源ありませんが、巨大なショッピングモールを目当てに多くの人が集まっているという特異な状況で、非常に不思議な場所になっています。そこにある大きな池を称して「レイク」と私たちは呼んでいます。このレイクは河川の氾濫を抑制しようという目的で作られた大きな調節池で、併せて市民の憩いの場として活用できる特徴を持ちます。水辺の良さをアピールするようなニュータウンとして市民活動を推奨している場所になっています。その市民活動をおこなっているのが私たち「レイクアンドピース」です。この地域に根づきながら、住民の1人としてまちづくりに関わっています。

レイクアンドピースの誕生

イオンレイクタウンには大変多くのお客さんが来るようになったのですが、最初の頃は周辺の水辺には一向に人は来ませんでした。大きな池があってその周りに公園があるのですが、地域の方が時々散歩したりランニングしたりするぐらいしか使われていませんでした。地元としてそこを活性化させていくという雰囲気ではありませんでした。

その当時「水辺の祭典」という水辺活性化事業イベントを商工会議所と観光協会が手を組んで、3年にわたって年に1～2日のイベントとして始めました。内外から非常に多くのお客さんがいらっしゃったことで、水辺の魅力というのを感じてくださる方が沢山いることが分かりました。このことから、元々のレイクタウン計画を始めた市長などの考えは間違っていなかった、しっかりやれば必ず成功するに違いないと思うようになりました。これらの手応えと期待感から、私たちとしては地域事業者としてここに関わることができたらと思うようになりました。「水辺の祭典」は3年で終わり社会実験は終了して行政側から予算が付

かなくなりました。そんな経緯でこれは何とかしなければと、私たちが勝手に「水辺の祭典」を引き継ぐことにしました。行政主体であるよりも市民ベースでやった方が、もっと楽しくできるだろうという前向きな気持ちもあってレイクアンドピースという団体を立ち上げることとなりました。

大相模調節池が生まれた土地柄

少しご当地的な話をすると、江戸時代にあの徳川家康が大規模な河川事業を始め、関東平野全体の治水工事に取り組んでいるのですが、有名なのは利根川東遷事業と呼ばれ、1600年代の前半ぐらいに利根川を東側の今の銚子市の太平洋側に流し換えています。それ以前の中世の時代というのは、荒川と利根川は越谷で合流していて、その流れは全部関東平野に流れ込んでいました。非常に大きな川が二つ合流する形で、比較的高低差の少ない平地が続く越谷を流れていたという地理的現実がありまして、極めて水に弱い地域でした。ほぼ毎年、ちょっとした雨でも浸水し大雨が降るとすぐ大洪水というまちだったと歴史的に伝えられています。そういう土地柄もあり「レイク」と呼ばれている



大相模調節池で水上スポーツを楽しむ



湖岸風景

大相模調節池が作られたのです。越谷市には 1 級河川が 5 本も流れていて、そのうちの 1 つに元荒川があります。子供の頃にはよく氾濫をして膝下ぐらいまで浸かったことが何度もあるのです。そういった水害・治水対策のために調節池がよく用いられます。要するに雨水を川にすぐに流さず一時的に溜めおいて川が氾濫しないように調節する池のことです。治水対策だけで多大な費用をつぎ込む事業をするにはもったいないという意見もありまして、溜池を作ったとしても氾濫する時期や日数で考えると、本当に年に数日の利用できるかどうかの施設となります。防災的に機能し、かつ日常的に水辺が楽しめる場所といった市民に還元できる豊かな環境を同時に作ることを目指しました。小さな調整池をたくさん作るのではなく、河川の水を調節する大きな調節池を設けることで、防災と日常の豊かさが共存する計画が立てられました。当初の計画だと、越谷市の水辺から東京湾までヨットで行き来できる航路を作るというような計画もあったそうで、我々が子供の頃、その計画図を広報の新聞とかで見て非常にわくわくした記憶があります。

協調と好循環

レイクアンドピースの活動理念は、「人工池を使ってまちに賑わいをつくりたい」、「親しみを持って水辺のライフスタイルを末永く楽しんでもらいたい」ということです。そのような思いがあるのですが、レイクアンドピースの活動以前から携わっていると、レイクを活かしきれない様々な規制があって苦労しました。「現代風のもうちょっとスマートで都会的な開き方がある」と思っていて、自分たちが関わればもう少し面白くできるし地元を巻き込むこともできそうだという手ごたえは感じていました。最近のイベントでは 2 日間で 1 万人ぐらいお客さんが集まるまでに成長しましたが、イオンからは、そういう流れで協賛も含めて、我々のイベントに協力いただけるようになりました。彼らはイオンモールだけでなく、水辺にもお客さんを積極的に回遊させながら、地域とともに盛り上げていきたいと以前から考えていたようです。「レイクタウンのポテンシャルの高さ」とか「水辺の人を惹きつけるマグネット的な要素」をイオンはずっと以前から気がついていました。

レイクの行政上の管理者は埼玉県です。埼玉県としてもこれだけの人が集まってくると、もっとも効果的に地域を活性化できる優良事業として注目するようになってきました。民間事業者であるイオンと地域市民団体レイクアンドピース、埼玉県がその事業を盛り上げ進めていくようになっており、越谷市も本腰を入



大相模調節池のピオトーブ湖畔

れ直しています。埼玉県は非常に川が多い自治体なので、県としてはその水辺環境、水辺空間をいかに活かしていくかを非常に熱心に取り組んでいます。「水辺 de ベンチャーチャレンジ」という事業推進が埼玉県の企画にありまして、いわゆるその治水対策だけではなくて、河川の空間を豊かにしていくことで、埼玉東部地区の越谷レイクタウンが一つの大きなポイントに指定されていたということになります。2022 年 8 月には越谷市・埼玉県・イオン・レイクアンドピースで「大相模調節池湖畔水辺活用に関する基本協定」を結んで、この水辺を賑やかに活性化していこうと決めました。このイベントの主催者をやっていた私たちが中心となって、法人化してイオンとパートナーを組もうということになりました。

水辺と人の距離感

商業施設の延長線上として木造コンテナみたいな小さな建物をいくつか並べて地域の事業者さんとかのアンテナショップ的に使っていただくような計画をしています。今までイベントで使ってきたキッチンカーやテントで運営していたものを常設化する流れです。要するにここの水辺の滞在時間を増やすようなことを計画しています。規制がなくてみんなが自由に使えるような場所にしていくことで、そこが愛される空間になる。そのことがみんなで良くしていこうとか、いい風景にしていこうということに繋がると思います。とにかく「みんなが自慢できるような場所にしていきたい」というのが今の思いです。

安全への配慮の議論はありますが、レイクをより良い場所にしていくためには、柵がある所は取り払ってもいいし、これからは無い方がいいと思っています。護岸もテトラポットみたいな物でなく、人によっては

水辺にそのまま入って行けるようなものであってもらいたい。水辺の環境は、水に入りたい人が普通に入れるようにしていくことが理想だと思っています。水辺のデザインとしてはもっと「遊び」があった方がいいですね。それが今は完全に鎖で囲まれているのは残念です。そこはすぐにでも変えていけたらと思っています。

タウンミーティングと管理

現在レイクアンドピースが管理をしているエリアは、陸地の部分で 800㎡ぐらいです。もちろん水面は入っていません。基本方針としてはあえて「厳重な管理をしている様には見せない」としています。今後アクティビティを増やしていくにあたり、管理者という立場であの場所に誰かが常にいる状態を作りたいことを想定しています。それを一体誰がやるのかといったときに、イオンなど志を共にする団体と協力していきますが、具体的に言うとレイクアンドピースで手配し現場を運営していくでしょう。

そのようなことを考えていくなかで、イオンとレイクアンドピースでタウンミーティングを始めました。私たちがイベント等を通じて、共感してくださる方も沢山いらして、その一方で、やっぱり反対の意見とか、もっとこうした方がどうか？という意見だったり、地域からの単なるクレームだったりとか、苦情とかっていうのも少なからずあるのです。イオンも「地域とともに歩んでいきたい」とか、「地域から認められるモールになりたい」と思っているようですが、交通渋滞や騒音、ゴミ問題などいろんなことで苦情も絶えません。みなさんの意見を聞いてみたいと思っても、ほとんどクレームや苦情処理になってしまう。そうなってくるとイオンなどの大企業はなかなか地域の中に入っ



レイクタウンとアート

ていけません。そこで最初からそこを繋ぐためにも私たちが少し前に出ながら、地域の人たちの声を聞いていく役割を担っています。2023 年には「アートが集まる、アートを楽しむまちづくり」をテーマとしたタウンミーティングも開催されました。アートに対する市民の関心が非常に高く、タウンミーティングの定員を大幅に上回る大盛況でした。アートによる気づきのように、住民の方が街のことを考えるきっかけになれば、水辺とアートの関係もこれからより求められていくと感じます。

水辺の持つ価値

水辺のイベントが成功しはじめた大きな理由は「共感力」を得たことだと思います。私たちに対する期待感とか可能性を感じてくれる人が、たくさん増えてきている。それと楽しむ人、いわゆるプレイヤーが、見ているだけじゃなくてそこで何かしてみたいと思うようになってきました。それに伴って水辺に集まる人も増えてきています。多くの方々に SNS などでもなんでも拡散して発信していますので、「越谷にこんな良い処があるよ！こんな水辺で楽しいことできそうだよ！」という実態を知ってくれた方が単純に増えてきているのだと思います。本当にうれしいのは、実際のところレイクタウン地区だけでも 2 万人以上の方が定住する場所になったことです。これからは人工的だった水辺がちょっとした森などになり木陰が沢山できてくるなどといった自然豊かな場所になれば、越谷の本当の風景になるのかなと思います。我々としては豊かな水辺の日常を作りたい。これが最終的な目標なのかもしれません。

(情報文化研究委員会 栗田祥弘)

レイク アンド ピース

畔上順平

埼玉県越谷生まれ、越谷育ち。

株式会社けやき建築設計・櫛組で建築活動をしなが、越谷レイクタウンで定期的に開催するフェスなどをレイクアンドピースとして民間の市民活動として企画・運営している。

藤田 融

埼玉県越谷生まれ、越谷育ち。

越谷で 3 代続く歯科医院を運営しながら越谷のまちづくりにも積極的に参加。現在レイクタウンに住みながらレイクアンドピース活動をおこなっている。

インタビュー 2023 年 11 月 23 日 (リモート併用)

メンバー 尾崎元担当理事、露口前委員長、高橋委員長
栗田副委員長、雨山智子、大田敏彦
置鮎早智枝、中村弘子

現代の「市中の山居」－３つの池を考える－❸

高ヶ坂松葉調整池



高ヶ坂松葉調整池・通称めだか池

なぜ、高ヶ坂松葉調整池か！

コロナ時に近場（大田区）の湧水池を調査し始め、地域の様々な湧水池 18 箇所ほぼ全て調査した。国分寺崖線に沿った地形の最後が大田区、池の殆どが崖線に位置し、地形の成り立ちが文明や文化を作る！そんな池の調査をと思った。

しかし研究対象は都市機構に必要な不可欠な治水池となった。前情報文化研究委員長の露口典子氏が偶然ビオトープに特化した高ヶ坂松葉調整池を知り、今は亡き坂上直哉氏と３人で訪問した。鶴見川流域に約 5000 もある調整池の１つで、植栽は有るがコンクリ護岸の四角い池、これが癒しの池になり得る？と思った。しかし保護団体が子供達と一緒に池の生態系を調査する「心を育む場」であった。しかもカルガモ親子が坂下にある恩田川まで移動する、その光景をと、地域のみならず遠くから見学に来るほど有名な調整池だった。

（情報文化研究委員会 置鮎早智枝）

「高ヶ坂松葉調整池」は、1988（昭和 63）年の区画整理事業により築造された調整池を、1999（平成 11）年環境庁（現環境省）所管「自然共生型地域づくり事業」の補助を得て、豊富な湧水を活かしビオトープとして整備しました。沢山のめだかが生息していることから通称「めだか池」と呼ばれ、現在では 18 種類のトンボなど多くの生きものも生息するようになり、カルガモやカワセミも飛来しています。また、近隣住宅にとっての潤いを感じる休息の場であるとともに、環境教育の場になっています。

町田市下水道用地等アダプト事業実施要綱の規定に基づき、市民団体（NPO 法人鶴見川源流ネットワーク）と簡易清掃・管理作業などに関する管理協定を締結しています。偶数月の第 3 日曜日の午前に簡易清掃・管理作業と生きもの調査が行われており、一般の方も参加できます。（町田市 HP より）

所在地 東京都町田市
JR 東日本 横浜線成瀬駅下車

NPO 法人 鶴見川源流ネットワーク 深見幹朗氏インタビュー

2023 年 2 月、情報文化研究委員会では、町田市にある高ヶ坂松葉調整池についてお話を伺うため、NPO 法人鶴見川源流ネットワークの深見幹朗氏にインタビューをお願いした。オンライン会議の画面で見せていただいた地図で、鶴見川流域につくられた約 5000 もの調整池の数に圧倒され、松葉調整池のみならず鶴見川流域の調整池の成り立ちについて知る貴重な機会となった。

河川の整備（築堤・浚渫などの可動整備、遊水池などの建設等）や下水道の整備（管渠・ポンプ場の整備等）など通常の治水対策に、保水（自然地の保全、防災調整池の設置等）、遊水（盛土の抑制、営農環境の改善等）、減災（警報避難システムの確立、水防管理体制の強化等）対策という流域対策を併せて行うことを総合治水と呼ぶ。鶴見川においては、町田市小山田地区の源流から横浜市鶴見区の河口まで、流域全体で鶴見川流域総合治水が行われてきた。地域ごとではなく流域全体で行うことが大事なことである。現在多くの調整池が在るのも、その一環によるものであると言える。

1991 年より始まった鶴見川流域ネットワーキング（TR ネット）は、バクの姿をしている流域地図を共有しながら流域規模の市民連携を進める流域市民団体の交流・連携活動（ネットワーク活動）である。川づくり・まちづくりを通して、持続可能な未来を開く新しい流域文化の育成を目指してきた。TR ネット活動は、連携鶴見川流域ネットワーキング（連携 TR ネット）と、NPO 法人鶴見川流域ネットワーキング（npotr ネット）の協働により進められている。ひとつひとつの行政区画単位での活動ではなく、鶴見川流域という広範囲のエリアを基に行政とも協力しており、流域の中に支流等にかかわるサブネット団体があり活動している。

NPO 法人鶴見川源流ネットワークは、TR ネットのサブネットである鶴見川源流ネットワークに参加している団体である。

町田市高ヶ坂の松葉調整池は住宅街の中にある調整池であり、通称「めだか池」と呼ばれている。この調

整池は、NPO 法人鶴見川源流ネットワークが町田市と協定を結んで簡易清掃などを行っている。

コンクリート張りの方形構造（用地：2250㎡、下部：1760㎡、深さ：2.55m）だが、下面の水抜き穴等から良質の地下水が流入し、調整塔によって適当な水位を確保できる特徴があった。この特性に注目した町田市は、1998 年、環境庁の「自然共生型地域づくり事業」補助金を受け、市民の意見も生かしながら、同調整池を水生生物の生息地として整備する計画をたて、1999 年春、「メダカの繁殖する調整池」を実現させた。

水位は 20cmを保ち、80cm程度の深みもつくってある。コンクリートの隙間から葎（よし）が生え、メダカが繁殖する手助けとなった。調整池の周囲にはフェンスが立っているため、人が立ち入れないサンクチュアリとなった。年に 6 回近隣の子どもたちや住民とともに中に入り、簡易な清掃と水生生物調査などを行っている。（偶数月の第 3 日曜の午前中）

町田市は、池にたまるヘドロ対策等のために、年に 1 回は水を抜き、調整池の清掃を行っている。当初ボウフラの繁殖による蚊の発生が心配されたが、メダカ等が捕食していることが考えられ、現在まで問題は起こっていない。

町田市内の調整池の数は 100 以上あるのだが、その中で自然が多く見られる調整池の数は案外少ない。

市内小山田地区にある小山田緑地は、多摩ニュータウンに隣接する丘陵地帯にあり、複数の池や調整池を保有している。小山田緑地における雑木林管理、水辺ビオトープの整備、草原の調査など、また公園づくりや環境整備・調査も、この NPO 法人鶴見川源流ネットワークで支援している。松葉調整池だけではなく、興味があればこちらまでご覧になることをお勧めしたい。

（情報文化研究委員会 栗田祥弘・雨山智子）

深見幹朗

愛知県名古屋生まれ。小牧市で育ち、就職で上京、現在まで東京都町田市で暮らす。1999 年子どもたちと親しんだ恩田川で活動したいと恩田川の会を設立、鶴見川源流ネットワークに参加。2004 年 NPO 鶴見川源流ネットワーク設立に伴い理事就任。2018 年には事務局を兼任し現在に至る。

インタビュー 2023 年 2 月 28 日（リモート）

メンバー 尾崎元担当理事、露口前委員長、高橋委員長

栗田副委員長、雨山智子、大田敏彦

中村弘子

オブザーバー 大石幸奈

高ヶ坂松葉調整池訪問

情報文化研究委員会では、長期間にわたって高ヶ坂松葉調整池に関心を持ってきた。

2021年6月20日に数人のメンバーで松葉調整池を訪れているのだが、町田市内の池についてや湧水、松葉調整池でのカルガモの引っ越しに興味をを持ったことによるものだった。

そして2023年2月、鶴見川源流ネットワークの深見幹朗さんにお話を伺う機会を持った。(前ページ参照)

その後の2023年11月、改めて水が豊かな町田市に注目し、4名の委員で芹が谷公園の湧水をたどり、周辺の調整池や恩田川を巡った際にも、松葉調整池を訪れた。実際の松葉調整池を見た時に、周辺の調整池は空堀が多かったのに、水を湛えているこの池の意味や、普段は閉じられている松葉調整池でどのような活動が行われているのかを知りたいと思った。

「めだか池のお世話」への参加

2024年2月18日、NPO法人鶴見川源流ネットワークが主催している、2ヶ月に1度の「めだか池のお世話」のプログラムに参加すべく、4名のメンバーが訪問することとなった。

2月としては気温が高く、心配していた雨も降っていない。10時から開始するプログラムに向けて早めに到着すると、NPO法人鶴見川源流ネットワークの



松葉調整池の看板



水位を下げる説明を聞く情文研メンバー

深見幹朗さん、石川日出郎さんはすでに準備を行っていた。清掃用具、網などが用意され、長靴でも入ることができる深さにまで水位を下げる作業に取り組んでいるところだ。年に1度大規模な清掃作業をするときは、池の中心にある深い部分に生物を追い込んで、周囲はほとんど水がない状態まで水位を下げるそうだ。溜まっていた水は暗渠を通り、近くの恩田川（鶴見川の支流）に放出される。

事前に、「2月は寒くて人も来ないし、生物も動いていない」と聞いていたが、はじめは1匹も見えないと思われたメダカも少しずつ姿を現し、トンボのヤゴなど何種類かの生物が採集された。

当日深見さんから紹介された、カルガモのお世話をしている落合昭夫さん、町田市の下水道部にお勤めだった柳田賢さんにお話を伺っている間にも、生きもの調査に参加する方がやって来たり、話しに加わったりする方々がいた。また、池の敷地周りのゴミ拾いをしていると近隣の方々に声をかけてもらう場面もあり、公開日ならではの光景が繰り広げられた。

松葉調整池は、「かるがものお引越し」でマスコミによく取り上げられる場所でもある。池の中ほどにある草むらにカルガモは卵を産み、雛がかえると親子で約200m離れた恩田川に道路を使って移動する。その姿が人気なのである。

カルガモたちのお世話をしている落合さんは、「近くの空堀の調整池にある草むらや近所の家の庭でもカルガモは卵を産んでしまう。しかし、水がない場所では雛が育つことはできず淘汰される。そのようなこと

が減るように、調整池でのお世話や他の場所の草刈りをして、環境を整えてきたが、メンバーも高齢になり継続できるのか心配しているところだ」と話してくださった。アベンジャーズとも呼ばれるお世話係「めだか池かるがもサポート隊」の皆さんは、葛西孝雄さんを中心として年ごとのカルガモの数などについての記録・集計も行っている。

元下水道部の柳田さんによると、27年ほど前に町田市が敷地(畑)を得てコンクリートの調整池をつくったのが松葉調整池の始まりである。東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、町田市の協議会で建設省が中心になって考えた鶴見川の治水問題解決のための一環であったが、流れ切らずに溜まっている水にわくボウフラなどへの苦情によって、テニスコート等に利用することも考えた。しかし、逆転発想をして常に水が溜まっている池としたそうだ。池の底を掘り下げ、当初と同じ容量の水が貯められるように調整池としての十分な機能をもたせている。

当時、町田市の環境生活課でメダカを50～100匹程度放ったところ生息できることがわかり、環境省に申請したら工事費用の半額の補助が出て、その後もビオトープとしてテレビ等でも取りあげられてきている。お世話は、深見さんをはじめとするNPO法人鶴見川源流ネットワークが全て行っており、住民や子どもたちは「めだか池のお世話」の参加者としてやっ

てくることが多い。

「鶴見川の治水問題も、長年の努力によってかなり解決されており、以前ほど深刻に調整池としての必要性を考えなくてもよくなってきた。しかし、松葉調整池には自然を守るという別の意味合いがあることが大事である。」と柳田氏は語ってくださった。

その後、石川さんの案内で恩田川にも足を運んだ。下水が整備され、川には生活排水が入らなくなっており、湧水が流れ込むような大変澄んだ水である。水に近づき水に親しむことができる場であることを知り、町田市の景観条例の「成瀬地域」に「恩田川沿い」と「高ヶ坂松葉調整池」が取りあげられていることの意味を、実際に見て確認することができた。

続「めだか池のお世話」への参加

「めだか池のお世話」への1回目の参加で楽しい時間を過ごした情文メンバーは、4月21日に2回目の参加のため松葉調整池を訪れた。そして6月16日、10月20日と訪問を続けている。

4月の訪問の折は、だいぶ暖くなり、桜の見頃は終わってしまったが2月とは異なる光景だった。子ども連れの参加者も増え、採集された生物を入れた水槽を見入る親子や、活動に参加したあとに、家で飼育するメダカをもらう親子で賑わった。



2024年6月の活動風景



採集した水中生物

6月、水に入るのにふさわしい気温となり、大勢の子どもたちと大人たちが次々と訪れる。延べ50人以上の参加者だったとのことである。

その中には、「蝶プロ」と呼ばれる活動からの参加者がある。「蝶プロ」というのは「南つく蝶プロジェクト」の略であり、町田市南つくしの小学校を中心に、蝶たちが住めるような環境作りを目指すプロジェクトである。自然観察会やウォークラリーも行っており、毎年この時期には、「めだか池のお世話」に参加しているそうだ。

水中の生物もたくさん採集された。定番のメダカ、モツゴや、さまざまなヤゴまで。もちろん採集だけではなく、池の手入れをしているわけで、ゴミ拾い、ヘドロの除去などを参加者皆で行っている。

そして、このときはカルガモの卵が、中央の草むらにいたようである。

10月は年に1度のかい堀りの日だった。水が放出され、水位がいつもより下がったので、生物も見つけやすい。この回も大変多くの親子が集まっていた。

毎回参加している青年のひとりに、とても水中生物に詳しい山本一輝さんがいる。見た目では私たちに全く区別がつかないようなヤゴなどを、たやすく分類でき、説明してくれる。その知識の深さに感心していたところ、なんと前回顔を合わせた「蝶プロ」のスタッフの息子さんだそう。お母様曰く、小さな頃ずっと参加していて興味を持ち、進学もそのような方面を選んだとのこと。

また、関心が強いからと言って、幼い頃子どもが1



松葉調整池から放出された水が流れ込む恩田川

人で水辺に行ってしまうのではなく、安心して参加できる場所があってよかった、と親ならではの気持ちも聞くことができた。

松葉調整池での活動は、声をあげながら皆で一緒に楽しくひとつのことに取り組むようなイベントではない。その時間になると、どこからともなく子どもや大人がやってきて、それぞれが池に入り、水の中を目を凝らして見つめている。時々滑ってびしょびしょになってしまう人たちもいるが、当初想像していたよりもずっと静かな集まりだ。

NPO法人鶴見川源流ネットワークによって、何年にもわたって休むことなく定期的に行われるこのこの活動に、さまざまな方々が参加していること。参加したことを憶えていて、大人になっても訪ねてくる人たちがいること。そのような情景を見ていると、松葉調整池は、調整池としての機能を果たしながら、町田市の住宅街の中で、自然を守り、生物に関心を持ち大切に作る心を育む池となっていると考えることができる。

(情報文化研究委員会 雨山智子)

訪問 2021年6月～2024年10月

メンバー 故坂上元委員長、露口前委員長

尾崎元担当理事、高橋委員長

栗田副委員長、雨山智子、置鮎早智枝

中村弘子

鶴見川流域センター訪問

町田市高ヶ坂松葉調整池は、鶴見川の氾濫に備えて設置された雨水調整池である。設置後にビオトープとして整備され、自然環境保護活動や環境教育の拠点となっている。町田市と管理協定を結んだ市民団体が清掃や生物調査等を行い、季節ごとに訪れる鳥や生きものの棲む水辺は地域の人々を惹きつけている。どのような経緯で雨水貯留の用途を越えて市民の集うビオトープとなったのか。調査を進めたところ、松葉調整池は鶴見川流域の治水と水循環系の健全化を推進する活動のモデルケースであることが判った。その関係を知るために、鶴見川中下流域の横浜市にある「鶴見川流域センター」を訪問した。

「鶴見川流域センター」は鶴見川、多摩川、相模川を所管する国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所の鶴見川管理にかかわる地域防災施設であり、市民向けに鶴見川流域の自然、環境保全、利治水事業に関する情報を発信している。センターの管理運営を受託しているNPO法人鶴見川流域ネットワークの事務局長・小林範和さんにお話を聞いた。

鶴見川は町田市の湧水から川崎市・横浜市を経て東京湾に注ぐ一級河川であり、大きな氾濫を繰り返してきた。昭和30年代後半より流域の市街化が急激に進み、



鶴見川流域水協議会 パンフレット

保水力の高い森林や田畑が急減した。河川整備と下水道整備だけでは水害を防ぎきれなくなったため、1980年、鶴見川総合治水対策協議会が設置され、「総合治水対策」の策定が始まった。総合治水とは、従来の河川整備と下水道整備だけに頼る治水ではなく、行政区を超えて国と流域の自治体が連携し、河川対策、下水道対策、遊水地、雨水調整池や保水のための緑の保全などを同時に進める治水の方式である。この策定には早い時期から市民も参画した。1991年に設立された「鶴見川流域ネットワーク」(NPO法人設立は2003年)は、行政と市民をつなぎ、施策の持続性を確保し、市民の立場で推進する活動を行っている。2004年、総合治水は一定の成果を上げたとして、治水を基本としながら流域の様々な課題に取り組む「鶴見川流域水マスタープラン」が関係行政の長の誓約で合意された。水マスタープランは「洪水時水マネジメント」「平常時水マネジメント」「自然環境マネジメント」「震災・火災時マネジメント」「水辺ふれあいマネジメント」の5つの柱から成り、推進のための様々な施策が実施されている。

高ヶ坂松葉調整池は、流域の自然環境の回復・保全に取り組む「自然環境マネジメント」の推進に大きな役割を果たしている。川を軸にして生きものが棲める場所をつくり、そこをネットワーク化し、流域全体の生物多様性の回復を進める。この推進策の一環としてビオトープ化され、多様な生きもの棲む豊かな環境が創出された。現在は市民団体「NPO鶴見川源流ネットワーク」が維持管理し、自然保護活動、環境教育活動の拠点となっている。同団体は高ヶ坂松葉調整池での活動が評価され、平成27年度「手づくり郷土(ふるさと)賞」(国土交通大臣表彰)の国土交通大臣賞(一般部門)で奨励賞を受賞した。

小林事務局長のお話は、治水のための施策から未来に向けての地球環境保全まで、大変興味深く、松葉調整池が現在の姿になるまでの経緯を理解できた。そして、流域の自然環境をまもり未来へつなげていこうとする市民の意識と活動が、防災の枠をこえ、自然と共生する心と文化を育てていることに、深く感銘を受けた。

(情報文化研究委員会 中村弘子)

小林範和

1972年千葉生まれ。千葉大学園芸学部卒。技術士(建設部門)。

北海道での森林作業員、青年海外協力隊(植林・バラグアイ)を経て、2003年よりNPO法人鶴見川流域ネットワーク職員。

2005年より現職。

訪問 2024年2月29日(鶴見川流域センター)

メンバー 尾崎元担当理事、高橋委員長、栗田副委員長

雨山智子、中村弘子

『生きのびるための流域思考』 岸由二著 ちくまプリマー新書 2021 年

町田市高ヶ坂松葉調整池のある鶴見川流域では全国に類を見ない「流域治水」という治水対策が実施されてきた。「流域治水」は、本書の著者岸由二氏が長く提唱してきた「流域思考」とも密接にかかわる治水の新方針である。

岸由二先生は「流域」を枠組みとして地球環境や人類の活動を考える「流域思考」を提唱し、国や自治体の委員、市民活動のリーダーとして、その思考に基づく治水、都市計画を実践し、実現へ導いてきた 1 人だ。

「流域思考」は未来を生きのびるための思考だという。これまで人類の発展を支えてきた産業と都市を枠組みとする思考から、地球の生態系を枠組みとする「流域思考」への思考の転換は、地球環境の再生と都市文化の持続を可能にするという。

本書では、人類の直面する問題を解決し生き延びるためにこれから進むべき方向のビジョンと方策が示されている。

第 1 章では流域の定義と水循環の仕組みを解説し、第 2 章では鶴見川における流域治水の方針と施策を紹介している。そして第 3 章において俄然その視野が広がっていく。またその議論において、日本における流域関連の法整備の進化という、我々が日頃意識していない分野についても改めて知らされることになる。

2020 年から国が推進している流域治水の新方針では「グリーンインフラ」という表現で、保水力・遊水力確保のために、流域の緑、自然地の確保・保全が重視されている。1996～2001 年まで環境省、国土交通省、関連自治体、鶴見川流域ネットワークINGで連携して推進された、「生物多様性保全モデル地域計画（鶴見川流域）」はその先行事例といっている。

1997 年、河川法の改正があり、利水・治水の基本目標に加えて、河川環境の保全管理が法目的に追加された。この法改正を受け、国土交通省から「多自然川づくり基本指針」が公表され、河川行政と市民運動の連携は更に推進される展開となった。

1999 年に検討が開始された「鶴見川流域水マスタープラン」は、2 年にわたる原案の検討、更に 2 年にわたる取りまとめを経て 2004 年に発足。このとき鶴見川流域は総合治水の流域から「水マスタープラン」という更に統合性の高い流域思考の実践を目指し始めたのである。

「水マスタープラン」は、治水を基本としつつ、平常時の水系の水質・水量の問題や、流域全域にわたる自然保護の問題、震災・火災時の避難等の支援、更には水辺ふれあい活動を手掛かりとして流域意識を育む市民交流・市民文化づくりを進める、としている。

今、地球の環境は危機を迎えている。危機を回避するために、2050 年までに世界の炭酸ガス放出量を実質ゼロにする。2020 年 7 月、国土交通省が発表した流域治水への転換宣言もその一環である。防災、環境保全の工夫を進めていく流域思考が、生命圏再適合のカギになるというのが筆者岸由二先生の意見に他ならない。

こうした動きを先導した行政、市民活動の先見性には驚かされることばかりである。鶴見川流域をモデルに、住民が生物多様性保全活動に参加するべく、水系やランドスケープが地域の人々を引きつけるアートのような魅力を持つことは、我々 aaca にとっても重要な戦略である。アートの存在意義を考え直す上で、地球を救うという大義名分の一方でメダカやカワセミとの親交を伴うという、理念と日常が二重写しとなる多様性の時代に我々は生きていること、生かされていることを知られることになる。鶴見川の総合治水対策は、生物多様性保全から地震防災や地域文化までを流域の視野で扱っていかうという、「流域水マスタープラン」に拡張されて、まさに「持続可能な暮らしを実現する」のである。

(情報文化研究委員会 尾崎 勝 中村弘子)

岸 由二

1947 年東京生まれ。

慶應義塾大学名誉教授。理学博士。専門は進化生態学。

流域アプローチによる都市再生論を研究。鶴見川流域、多摩三浦丘陵などで実践活動を推進。

NPO 法人鶴見川流域ネットワークING代表理事、NPO 法人小綱台野外活動調整会議代表理事、NPO 法人鶴見川源流ネットワーク理事長

慶應義塾大学 満倉靖恵教授インタビュー

「感情を分析するには、脳の中で何が起きているのか？科学的根拠（エビデンス）に基づいた研究成果が必要でした。」そう、お話しいただいたのは、慶應義塾大学で、面白い研究をされている、満倉靖恵教授にインタビューさせていただいた最初の一言である。

現在、世界的にも注目を集める満倉教授の研究課題とは、25 年以上にわたる、視覚による脳波と感情の研究をされていて、イノベーションとしてリアルタイムで脳波を測定して感情を認識し分析できる装置を開発された。

これにより、定量評価というこの分野に長年なかった数値的評価を加えた第一人者となられ、例えば空間内に緑を置くだけでどの様な効果が得られるのか？集中度がどれだけ上がるのか、精神神経科学教室の兼任教授である同氏は、精神的な疾患の人達にどのような影響を与えるのか、同時に体内ホルモンにどのような変化が生じているのかを研究されている。

アイフォンカメラで視線の先を判るようにして、見る物と脳波の変化を同期させて観察し、さらに血液検査を加えて、その場合、体内ホルモンがどのように変わるのか？定量評価できる要素を多くのデーターを解析し積み上げてくれました。

あまり詳しく得られたデーターを伺うことは、各研究プロジェクトの守秘義務に抵触しそうなことばかりであるが、2015 年までの 17 年間で、8000 人以上のデーターを集めて、脳波測定から集中度が上がるとはどのような事象なのか？心地良い状態とは？ストレスを数値化し定量評価を構築されてこられた。「池の廻りに人が集まる」という我々の仮説に対しても、科学的根拠が証明されているのか？との問に対し、別件で進められている産学共同の研究課題では、湧水で有名な S 公園に人が集まる理由が求められ、ストレスが下がることが定量評価として実証されたとお聞きした。

綺麗な水が湧く所には癒し効果や、嫌な気持の改善もみられ、ストレスマックスの人が水辺に 1 時間接すると、最大ストレスが 2 0 %も改善した…とお話も聞かせていただいた。

アートやデザインを観たとき人々の感情がどのように変化するのか？アートに興味のない人でも、見た人の心は揺らぐのか？定量評価の結果は、相対的に脳内ホルモンとしてセルトニンが分泌され、穏やかとなり落ち着くとの総論を得ているという。

アートに接した時の感情変化は、サイエンスとアートの関係性を広げ、その効能を証明する世界的に最も注目されている研究課題の一つとなっている。「アートをより美しくする為にはどうすればよいのか？」世界的な最先端の研究が進むいくつかの大学では、既に専門学部までできていて、芸術や自然に接した時の人の脳内で生じる科学的変化について数値化し解明していこうという…多くの人々の探求心と好奇心を刺激し続けているようだ。

このような世界的潮流は、単に学術的研究活動に止まらず、芸術や自然保護を進める社会活動団体にとっても無視できない成果となっている。

aaca としても、今後こうした異分野研究の方々との交流が必要不可欠となっていくことだろう。

(情報文化研究委員会 高橋圭太郎)

インタビュー 2023 年 12 月 11 日

(慶應義塾大学矢上キャンパス)

メンバー 尾崎元担当理事、高橋委員長

置鮎早智枝、中村弘子

オブザーバー 権藤 尚

満倉靖恵

日本の電子工学者。医学研究者。

慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科教授、慶應義塾大学医学部精神神経科学教室兼任教授、感性アナライザの開発者。

工学と医学の博士を持つ。

慶應義塾大学医学系研究科 博士（医学）。

「柏の葉にSMCがやってきた」

鹿島建設 建築設計本部 建築設計総括グループ グループリーダー丸山 琢氏に聞く

最初にこの街の立案、計画には、柏市主催の「大学と地域の連携交流会」が開かれ、UDCKの初代センター長でもある故・北沢猛東京大学教授（当時）が、柏の葉のまちづくりをけん引する「センターの設立」を提言されました。そこでは、柏の葉キャンパス駅の新設を含む「柏の葉スマートシティ」を旗頭とした新しい街の創造が行われ、UDCK・柏の葉アーバンデザインセンターという全体を管理統括デザインし、この街の未来図を描こうとする場が設けられました。

新たな構想を柱に、街づくりが行われることとなった経緯は、周辺の最大の地権者である三井不動産のゴルフ場があった場所で、全く何もない場所を、公・民・学の連携による「環境と共生する田園都市づくり」「創造的な産業空間の醸成」「国際的な学術・教育・文化空間の形成」「サステナブルな移動交通システム」と4つの目標を掲げながら開かれた先端的で自立した都市づくりを目指していました。

世界中から研究者が集まる、国際的な学術研究都市を目指す構想はそこに端を発していたのですが、創造的な産業空間や、国際的な学術・教育文化の空間と位置付けて、柏市と千葉県に、東京大学、千葉大学の4者が連携・協働し、2008年3月には柏の葉国際キャンパスタウン構想をとりまとめました。「環境共生」「健康長寿」「新産業創造」の三本柱が街づくりビジョンというような文言が謳われ、ここの土地に建てる建物は、いろいろと吟味され、ルール化や協議しなければ誘致できないこととなりました。

イノベーションキャンパスシティとし、緑あふれる駅前広場や日中にも賑わいがあり、多種多様でいてコンパクトな街づくりを目指し、都心をそのまま持って来るのとは違って、タワーマンションがあり、駅前の商業施設と豊かな住宅というのが揃って、そこに先端企業の誘致をして、職住近接が実現した郊外型・多機能複合型の街づくりを行い、それが新たな付加価値を生むような試みを目指していました。

UDCK・柏の葉アーバンデザインセンターが「産業創出とイノベーション企業の誘致」を目指していたタイミングで、参画を申し出てくださったのが「SMC株式会社」です。SMCは自動制御機器業界において、国内外で圧倒的なシェアを誇る世界的トップメーカーです。

今回、SMCが柏の葉スマートシティに開設する「(仮称)柏の葉キャンパス新技術センター」は、世界中から優秀な人材が集まり、健康で快適、効率的な環境の中で働く意欲が高まり、さまざまな人々との交流を通じてイノベーションを生み出す研究開発拠点となることを目指しています。A棟の敷地前には、街のシンボルである『アクアテラス』と呼ばれる池が広がり、敷地形状に合わせた特徴的な曲面のファサードが完成すれば、つくばエクスプレスの車窓からもよく見えるようになります。また、C棟敷地前には豊かな森が広がるコンブクロ池公園が位置し、2つの敷地をつなぐB棟を含めた3棟が一体となり、柏の葉キャンパスシティの街並みに新たな魅力を加えることで、SMCのブランドを象徴する空間が創出されます。

2022年にKAJIMA DESIGNによる設計が開始されました。コンセプトは「街に開かれた研究所」であり、アクアテラスと連続性を持つ柵のない広場や、一般利用者も楽しめるテラス付きオープンカフェの設計が特徴です。1階部分をセットバックさせて広場を確保し、外装にはガラスを多用することで街への閉塞感をなくし、建物内の活気が街からも感じられるように配慮しています。

さらに、「街と調和した研究所」を目指して、南側の長大なファサードを分節デザインにするほか、広場の緑を街へと広げる屋上緑化、アクアテラスに面した広場には桜並木を計画。また、「SMCらしさ」を表現するために段状の屋上



(仮称) SMC 柏の葉キャンパス新技術センター 完成予想パース

テラスやグリーンループを通じてアクアテラスとコンブクロ公園を結び、水平ラインを活かしたファサードや木調ブラインドで温もりを加えています。従来の研究施設とは一線を画す、開かれたデザインとなっています。

UDCKの出口センター長を中心に、街のビジョンがまとめられ、関係者間でイメージや方向性を共有する一方で、企業側には高いハードルに感じられる部分もあったようです。しかし、「地域の制約が良い建築を生む」という考えのもと、このプロジェクトはその好例となりました。

建築やランドスケープだけでなく、街全体のデザインを突き詰めた結果、SMCのような素晴らしい企業を誘致できたことは、街づくりの成功を象徴しています。また、SMCの社員の皆さんとの意見交換では、「食堂は、皆がここに集まり食べたい魅力ある空間にしよう」「新人歓迎会をテラスでバーベキューをしたい」といったユニークなアイデアが次々に飛び出しました。さらには、アクアテラス側の景観維持についても意見が交わされるなど、既にSMC社員とUDCKの間で活発な議論が始まっており、社員1人ひとりが積極的に建築づくりに参加する姿勢が感じられます。

SMCの参画により、柏の葉の街並みがさらに魅力的になると確信しています。最終的には、そこに住む人や働く人の意識が街づくりを完成させるのだと感じています。

(情報文化研究委員 高橋圭太郎)

インタビュー 2023年12月5日
(鹿島KIビル)

メンバー 尾崎元担当理事、高橋委員長
栗田副委員長、雨山智子
置鮎早智枝

丸山 琢
1968年 千葉県生まれ
1992年 神奈川大学工学部建築学科卒業
1992年 鹿島建設入社
現在、鹿島建築設計本部建築設計統括グループリーダー

関東平野のランドデザイン

武蔵野台地の豊かな森林は、気の遠くなるような歳月を使って豊潤な土壌を生みだし、雨水はミネラル豊富な河川となっては江戸湾へ注がれ、命あふれる豊かな海を作りだしました。

同時に多くの堆積物が海を埋め、干潟を作りながら広大な汽水域を作り出しました。

関東平野の大部分が、まだそのような自然豊かな僻地だった時代に徳川家康という、新しい為政者が大規模な街づくりをはじめることとなります。

江戸には、かつて無いほどの移住者達が押しかけ、高低差のある大地を削り、湾奥まで伸びた湿地、汽水域は次々と埋め立てられ、郊外では大規模な灌漑工事が進められました。この時代の石高として評される数字以上に、米の生産量はうなぎ登りに向上し、将来的な新田事業なども加算すると、悪くない国替え話だったのではないかと想像されます。この関東平野には、大変な悩みがありました。それは、江戸時代以前の度重なる洪水。多くの人々を苦しめた大河の氾濫だと言われています。そこで、考え出されたのが、国内史上、最大規模の土木工事「利根川東遷事業」が始まりました。簡略していうと、この時代まで利根川は東京湾に流れ込んでいたものを、そのまま銚子沖の太平洋へ迂回放水するように人工的に付け変えてしまえ…という他に類を見ない大規模事業を実施したのです。

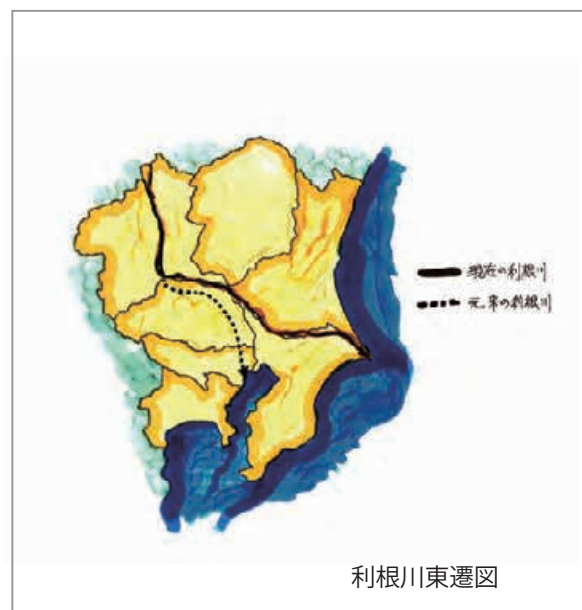
これらは、安定期を迎えた豊臣時代に始まった事業で、後年、明治時代になるまで大きな水害を抑止し、江戸を水害から守り続けました。家康が偉いのは、領民の安全と安定した食糧供給こそ、人心を掌握して進むべき為政の在り方だと考えていたのではないかと…という点です。

東遷事業の総責任者を担った伊那忠次は、関東国替えと同時期に大名となった人物で、川を蛇行させ、大雨の時にわざと水を溢れさせ、一時的に池として漏斗のように大量の水を留め置く「遊水地」の発想を（設備を）大規模に具現化した人物で、現在の熊谷市に残る「中条堤」や「川島領大困堤」さらには、その一族による「山田沼堰」や「福岡堰」なども、比較的勾配の無い関東内陸部に設けられ、様々な創意工夫を治水事業に凝らすことで、日進月歩、江戸の町を支えたようです。

ここでわかるのは、関八州のランドデザインがしっかりと確立した上で、初めて世界的な大都市江戸が誕生した…ということです。

賑わいは人々を集め、富を生み、心のゆとりを作り出し、元禄・化政の多彩な文化、芸術を開花させる原動力となったと考えます。情報文化研究委員会が何故、「市中の山居」の研究に拘り、やがて池や水辺へと繋がっていったのか…ご理解いただけましたでしょうか。

（情報文化研究委員会 高橋圭太郎）



「市中の山居」から学ぶこと
—新たな領域を目指して—

坂上氏のメッセージを読み解く

情報文化研究委員会 元担当理事 尾崎 勝

「市中の山居」から学ぶこと

「市中の山居」という「水と緑」の自然環境には、青空を映し出す水面と葉騒する森の原風景に、計り知れない魅力と多様性がある。都市の中で埋め立てられることなく今日まで生かされてきた「水と緑」には、古くからの信仰の対象であったり、遁世者の「侘び寂び」の庵であったりという、まるでタイムマシンのような場所が数多くある。その多様性に関する「文化」や「哲学」、「歴史観」や「個と公共」など、過去の記憶が地霊のように蓄積された「場所の力」の深掘りには大変興味深いものがある一方で、自然環境そのものに関しての今日的な「価値観」の多様性を領域を拡げた幅広い視点で見直してみることも、人間味溢れる様々な「分野」の発見に繋がっていくと考える。

例えば調整池や灌漑用水としての広域に渡る様々な流域での治水や利水などの土木的な「効果と効用」について、また再開発などにおける人間の交流や回遊との関係といった都市的な「居場所づくり」について、更には景観や美的要素に関する行動の誘発と人間的な「共感の感性」について、古くは中世からの歴史の継承が現代においても不変のものがある一方で、昨今の

環境変化の中で大きく変革しているものも少なくないのではないか。土砂災害の多発は地域の守り神としての「水と緑」の存在への信頼の力の衰弱へと意識変革を促す場合もあり、猛暑の中の林間の心地よい涼しさは省エネルギーや温暖化防止を含めた循環型社会への信頼の力の覚醒へと意識変革を促す場合もある。かつての日本の文化は地歴や風土からの影響を強く受けたものであったが、今や天候や気象への環境影響は世界的な社会現象となって、文明・文化と環境が相互に等しく影響を与え合う関係にあるといえる。一言で「多様性」といっても、今日のそれは「理と情」が複雑に重なり合って、往時の「市中の山居」の「多様性」からは更に重層的な時代変化を遂げているのである。

情報文化研究委員会のメンバーが、地域ごとの歴史や文化を起点としながらも「自然環境」とその「価値観」に着目しているのは、「分野」と「時代」の幅広い多様化と大きな変革のその先にあるものを、客観的にあるいは直感的に感じ取っているからではないか。即ち、「市中の山居」という庭園文化のテーマを発見し幾つもの水辺の事例を見学して、現代の都市における「水と緑」の魅力の体験と分析の活動を重ねてきているのは、植生や水系の「社会に開かれた自然環境」

の魅力の中に、かつての「生活感」や「歴史文化」に加えて、歓楽の賑わいから孤高の安らぎまでの空間性や水辺との間の柵の有無が与える距離感など、感性に根ざした「社会ニーズの多様性」を見出し、更にはそうした「社会ニーズ」と環境の時代の新たな「価値観」とを重ねた多様な個性を、夫々の「場所の文化性」として1つの全体像に描き出すことこそ、文化的な都市環境の創造を旨とする aaca の今日的なメッセージとして重要なテーマであると気づいているからに他ならない。

こうした「分野と時代」の幅広い視点で、何れも個性的な「柏の葉、越谷、高ヶ坂（鶴見川流域）」の3か所を中心に「水と緑」が持つ生活や文化の今日性を分析し、公と民と学で共に活動に参加する多くの登場人物とその役割分担を知る中から様々な多様性を「学ぶ」ことが、aaca の新たなメッセージの発信に貢献する道筋であると考ええる。これらの豊かな景観が持つ様々な「多様性」をつぶさに体験した上での今日的な課題の核心に触れるメッセージこそが、「都市・建築・美術・工芸」の新たな分野を開拓し、「理」をもって加えた幅広い領域との交流を促すことに繋がり、ひいては会勢拡大に繋がっていくのではないか。

「もの」と「こと」の領域拡大へ

「柏の葉アクアテラス」のアーバンデザインセンター長でもある東京大学出口敦教授との面談では、これからの個性的な街作りには「都市・建築・美術・工芸」の単なる一分野としてのランドスケープではなく、

「アートのような刺激」を持つランドスケープの多様性を客観的に評価した上で、その多様性の魅力と課題を「持続的な活動」によって「時間をかけて共有し維持する文化」こそランドスケープを含めたこれからの公共空間創造のプロセスに求められているものであり、街そのものの持続性と環境性に繋がる今日的課題であることを示唆されていた。

例えば清々しい水辺と閉ざされた溜め池、光溢れる芝生広場と暗く生い茂る雑木林といった「光と影」の多様性を感知し、それを街づくりの多様性にも活かして価値の持続に繋げるため、「都市・建築・美術・工芸」の融合には「直感の力と創造の力」だけでなく、社会との多様な接点を見出す「評価の力と発見の力」が求められ、その上で住民の交流と回遊を積極的に先導する「共有の力と発信の力」が求められているのである。

いわば、作品と活動という「もの」と「こと」の両面で、「感性と行動を科学する」知的先進性が「アートの力の進化形」として改めて求められていることになる。まさにそうした実践的活動の一つとして「工学から医学へ」の先駆的な領域拡大に挑戦されている慶應義塾大学満倉靖恵教授との面談では、「水と緑」の煌めきや静けさという物理的現象を前にしての興奮や集中、鎮静やストレス解消を、脳波の生理的変化という「リアルタイムのエビデンス」として捉え直す革新的な成果を通して、「感性の定量評価を多様性の交差する創造の場に繋げていく」という先進的メッセージを示唆されていた。言い換えれば、五感を介して多くの人間どうしの心が繋がりあう「アートと人間性」の「交流の交差点」を「医工連携」によって可視化する



柏の葉アクアテラス



越谷レイクタウン大相模調節池

ことによって、アートの可能性を従来分野を超えて拡張する、輝く未来社会が到来しつつあると言えるのである。情報文化研究委員会は、こうした先進事例の積極的学びの中から、「アートの魅力」を「もの」と「こと」の両面で最適化し維持し続ける「イニシャルとランニングの持続性」を「感性と環境への社会的投資」というメッセージとして発信するためにも、いわば「能動的テーマ」としての「アートの魅力の領域拡大」を探し求めることになる。

アートとアース・サイエンスの融合へ

課題とは常に「外を見る、外から見る」ものであり、そうすることによって視野が的確に広がり、成果物もまた確実に創造性を保つことになる。情報文化研究委員会の今回の的確かつ創造的な活動にはまさしくそうした「外を見る」視点が存在しているように思われる。aaca の活動は一見「民間」に限定された文化交流活動と思われるがちであるが、その定款にはもともと芸術的環境の「創造と保存」に関する調査研究という、「公的」な意味合いの情報発信もまた本来の活動として内包されている。なかでもランドスケープという分野は、景観形成などのアート性を介して「都市・建築・美術・工芸」の交流の中を拡げるだけでなく、保水や遊水などの防災機能や生物多様性を含む「グリーンインフラとしての流域水マスタープラン」（「鶴見川流域治水」において地域コミュニティ活動の礎となっている公民共有ビジョン）も求められている。いわば「自然環境との共生を基盤とする都市形成の持続性」というソフ

ト・ハード両面に亘る「公民連携活動」の社会性を本来の領域として含んでいるのである。

更にはデジタル化や少子高齢化に加え、気候変動やカーボンニュートラルなどの地球温暖化(地球沸騰化)に関連する今日的な時代背景の中で、昨今の災害を含む自然環境の多面性の再発見や、また一方では心地よく緑化された半屋外空間のウエルビーイングの感覚などをきっかけとして、そうした「多様性の再認識」を都市生活や地域交流の中で可視化し共有する活動、即ち自然への畏敬の念を背景にした「感性の可視化」を「原点」としつつ、それらを「媒介」として「自然環境の快適性を地球環境の健全性へ」と重ねていく調査研究分野が加わり、「都市・建築・美術・工芸」における「公民学連携」という大きな視野角を持つ未来の全体像が見えてくることになる。折しも COP15(昆明・モントリオール生物多様性枠組、2022 年)では、国土の 30%を生物多様性の保全で確保し、気候変動対策(減災)と生物多様性の保全とを両立させるなど、地球環境の持続と生態系の保全を相乗的かつ現実的な目標と捉えることで、創造的な活動のネットワークとそのための科学的な知見が改めて求められることとなった。こうした「生物多様性」は、そもそもの土壌基盤の形成から生物資源や気候の安定へ、精神の安定や芸術性へと繋がり、それらの活動を通して全分野の「豊穰性」を齎し、そうした時間軸の中で人間こそが「水と緑」に生かされているのだという、大きな「多様性の世界観」としてその視野を広げていくのである。

これらの要求を全て含むものとして、日本では公的な緑化義務のほかに民間の緑化努力と維持管理を評価

する国交省の新たな認証制度が始まろうとしている。気候変動対策、生物多様性保全、ウエルビーイングなどの観点から緑地の創出・維持を評価するものとして、モニタリングを反映した維持管理計画、土地の地形・植生・歴史文化を反映した緑化計画、更には心を和らげる休憩スペースの設置等、まさにアートの感性分析を含めた総合的知見によって日本の都市環境の持続性が保持されていく時代が訪れようとしている。

「水と緑」のアート性を取り巻くこうした「感性」と「環境」の目覚ましい進化は、「言語化から可視化へ」、「表現から共有へ」、「創造から持続へ」の活動として評価すべき時を迎え、aaca も「都市を健康にする」ことで「心と体を健康にする」と同時に「地球を健康にする」という「三方よし」の新領域を目指して、「アートとサイエンスの融合」から「アートとアース・サイエンス(地球の科学)の融合」へと更に進化し、新たな世紀の「市中の山居」へ引き継いでいく大きな転換点を迎えていると言えるのである。

共に創る時代へ

坂上直哉氏の 2018 年のシンポジウムから早くも 6 年、今こそこうした「課題の進化と拡大」に挑戦し、aaca の新しいメッセージの発信を目指す時であると考えて。2018 年の「市中の山居」のシンポジウムにおいてポスターに描かれた「土木、ランドスケープ、建築、アートからのアプローチ」というタイトルには、こうした「課題」に正面から向き合って「問い」を提示し、「もの」と「こと」の能動的活動を提案する広

角度のメッセージが表明されているように思われる。即ち、地形や水系などに関する土木の分野から緑化や水辺に関するランドスケープの分野まで、また生活と環境に関する建築の分野から感性と共感に関するアートの分野までの壮大な全体像へと改めて視野を拡げ、自然と共生するこれからの新たな都市作りにおいて、環境の未来や文化の発展に貢献すべく一堂に会して同等の立場で交流し共創すること。自己や自我の「領域」に縛られることなく「共に生きる」異分野交流によって、これからの SDGs の時代に貢献していくにはどうすべきかという、正に坂上直哉氏の志を思わせる「外を見る、外から見る」という視点がここにはある。

今こそこうした「感性と環境という新領域」への視点の共有と挑戦が必要な時代であり、aaca としても「都市・建築・美術・工芸」の交流を起点としながら、アートの魅力から地域の魅力へ、「ものとこと」の様々な断面へと領域を拡大し、公民学の幅広い視点での多様性と持続性の「個性化」を目指しつつ、領域を自ら限定しない異分野融合の「対話と創造」という「理念の革新」を積極的に発信することによって、aaca に対して改めて文化的かつ社会的な関心と信頼が寄せられることを期待したい。

尾崎 勝

1972 年～ 鹿島 建築設計本部

2008 年～ 鹿島 執行役員 建築設計本部長

2018 年～ 鹿島 副社長 建築設計担当

2021 年～ 鹿島 常任顧問

元情報文化研究委員会担当理事 現在 aaca 監事



高ヶ坂松葉調整池



光輝く未来へ

想像を、チカラに。



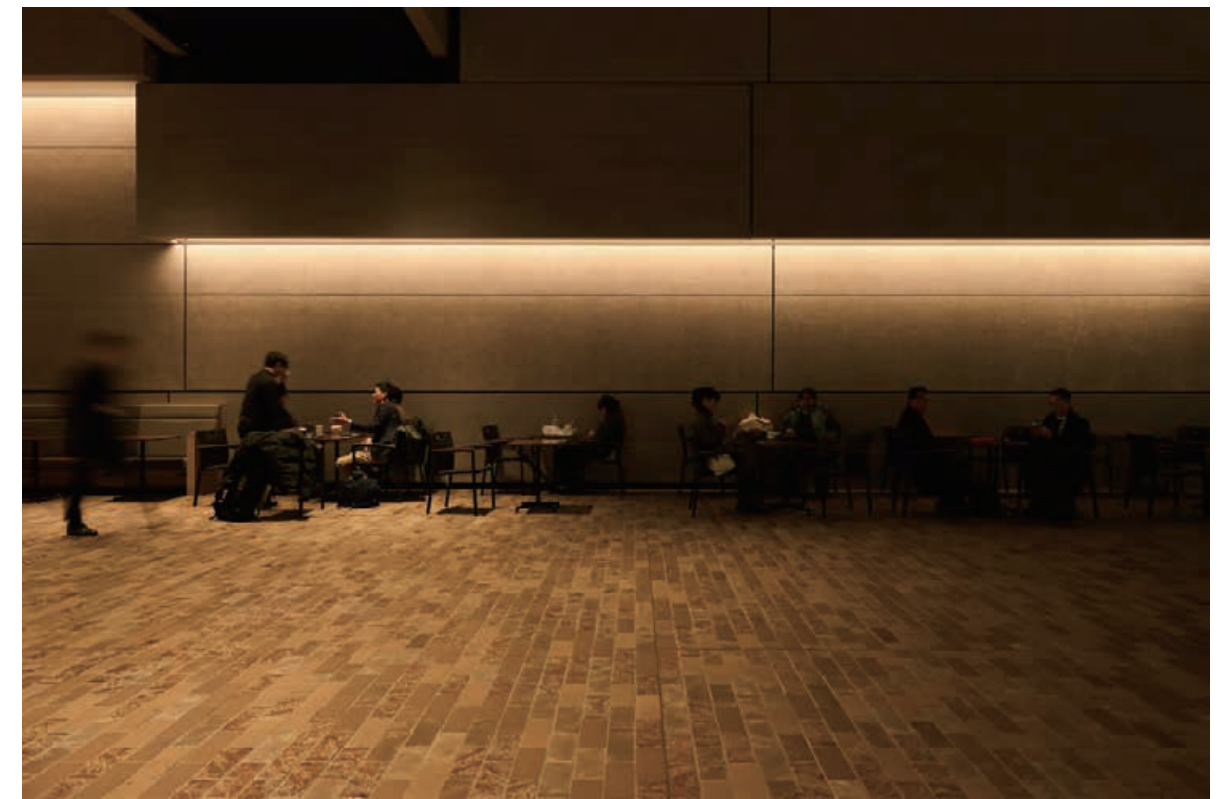
フランス人の小説家、ジュール・ヴェルヌが残したという言葉があります。「人が想像できることは、必ず人が実現できる」

100年以上も前に彼が空想したロケットや携帯電話が、世界の常識になっている今日。私たちは、「想像」の可能性を否定することはできません。いま、私たちが建設するひとつひとつが、地球の上でどんな存在なのか問われる時代。これから築かなければいけないのは、人と地球のいい関係です。100年先、200年先、ずっと先の未来まで。私たちは、想像します。たといま困難に思えることでも、やがて世界の常識になる日が来るために。

人が想像できることは、必ず人が実現できる。鹿島の都市づくりは、100年先を見つめています。

100年をつくる会社
in 鹿島

CERAMIC OLIVE INC.



olive

土とともに新しい景色を

織部製陶は、土という自然素材と人の手でしか成しえない可能性を信じています。

決して画一的ではない、ひとつひとつ異なる表情に美しさを見出します。

私たちは、土の表情を生かしたものづくりを通して、心の平穏と温もりを提供します。

土とともに、お客様とともに、新しい景色を生み出していくことを約束します。

織部製陶株式会社

olivebricks.co.jp
contact@olivebricks.co.jp

織部製陶では様々なタイルの採用事例がございます。

オーダーメイドタイルを中心に、

ご予算やスケジュールに合わせてストックしているタイルをご提案することも可能です。

タイルサンプルや資料のご請求、プロジェクトのご相談などお気軽にお問い合わせください。



WEBSITE



Instagram

協賛

法人

梓設計 三菱地所設計 森田事務所

個人

黒竹節人 岩井光男 柏尾 栄 齋藤卯乃 齋藤潮美
坂上冷美 本間 弘 常松欽治 露口典子 東條隆郎
森 暢郎 山極裕史

(敬称略)



編集後記

2018 年に、東京の過密都市空間に「市中の山居」をつくることは可能だろうか？という、比喩にとんだ多面的な命題を受け止めて始めた研究課題でしたが、始めて間もなく「なぜ、日本建築美術工芸協会が取り組む研究課題が『市中の山居』なんでしょうか？」という、多くの方々からのご質問をいただきました。

これが 21 世紀の人類を脅かす異常気象問題を象徴する世界的な指針でもある、SDGs が求める具体的な方策で、環境への更なる配慮、投資が不可欠な状況と考えたからです。

「水と緑」を取り戻すという都市を新しく考えるうえで重要な要素は、人々の心の問題でもあり、「市中の山居」の思想と合致していることに改めて気付かされました。今日、打つべき一手こそが持続可能な未来を築く唯一の方法であることに他なりません。

「市中の山居」を考え探し出す作業は、日本建築美術工芸協会が今後、何を行いどこへ向かうのか…。「協会の活動は未来の日本の景色、風景を作る活動だ」という核心を、改めて確信として浮き彫りにする作業でもありました。

刊行までにご協力いただきました土屋信行様、本耕一様、坂上冷美様、座談会会場をご提供いただきました東京藝術大学様をはじめ多くの皆様、ここまで情報文化研究委員会を応援・牽引くださいました諸先輩方に改めまして感謝を申し上げます。

情報文化研究委員会 委員長 高橋圭太郎

日本建築美術工芸協会 情報文化研究委員会

元担当理事 尾崎 勝 （建築家）

委員長 高橋圭太郎 （株式会社織部製陶 元役員・株式会社 IMA 織部 代表）

副委員長 栗田祥弘 （建築家・株式会社栗田祥弘建築都市研究所 代表取締役）

雨山智子 （テキスタイル造形作家・大学非常勤講師）

大田敏彦 （工業製品プロデューサー）

置鮎早智枝 （アーティスト・グラフィックデザイナー）

中村弘子 （ガラス造形作家）

中川一人 中島三枝子 藤田益一 立石博巳 外野雅博

市中の山居 ー共に創る時代へー

2025 年 5 月

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
情報文化研究委員会

108-0014 東京都芝 5-26-20 建築会館 6F

TEL 03-3457-7998

FAX 03-3457-1598

E-Mail info@aacajp.com

URL <http://www.aacajp.com>

表紙デザイン 置鮎早智枝

＊特記のない掲載写真は情報文化研究委員の撮影によるものです。